

# WEXUS

2015年度 春季特別展

大学博物館共同企画V



西南学院大学博物館

東日本大震災と文化遺産  
—被災と復旧、そして文化創造へ—

絆・  
連携

東北学院大学博物館

キリスト教の源流と東方伝播  
—受容と禁教、そして解禁—



## ごあいさつ

このたび、西南大学博物館とともに、時期を同じくし、お互いの博物館を会場にそれぞれの博物館が立案する企画展を開催することにいたしました。つまり、私ども東北学院大学博物館で西南学院大学企画「キリスト教の源流と当方伝播」を、西南学院大学博物館で東北学院大学企画「東日本大震災と文化遺産」を同時開催いたします。

西南学院大学と東北学院大学、日本列島の西南と東北のまさに対称的な位置に有る一方で、キリスト教を基盤とする特色ある大学教育を展開する両校が、このような形で連携し、互いの展示に間近に接することは、相互理解を深めるために大変重要なことと考えます。

また、それぞれの展示の作成には両博物館の職員とともに学芸員課程で学ぶ学生も参加いたします。学生時代に違う環境で学ぶ学生同士が交流することは多くの実りをもたらすことと思います。

さて、東北学院大学博物館は平成21年秋に開館いたしました。大学の研究成果を社会にお伝えすることが大きな目的ですが、現在のところは文学部歴史学科の研究成果を主に展示公開をしています。もう一つの目的は学生の教育と大学院生の学びの場所を提供することにあります。これまで5年間にわたり、学芸員課程館園実習を受け入れてきており、現場に即した実習を展開してきています。また、学芸員制度を設け、大学院生を採用することで展示作成、展示解説、資料整理などの実務を担当し、学芸員としての経験と実績を積む場として活用しています。学芸員からはすでに5名の学芸員、埋蔵文化財担当者を輩出しています。

西南学院大学には福岡県有形文化財ドージャー記念館があり、東北学院大学には国指定登録有形文化財デフォレスト館、本館、礼拝堂、旧図書館があり、両校ともにキリスト教を基盤とする教育の長い歴史と伝統があります。今回の共同企画展を契機に今後とも交流を深めることを願っております。最後になりましたが、企画展の実施にあたり、お世話をいただきました西南学院大学博物館長をはじめスタッフの皆様から心から御礼を申し上げ、ごあいさつといたします。

2015年6月12日

東北学院大学博物館

館長

辻 秀人

## ごあいさつ

今回は第5回目となる大学博物館合同企画展を、宮城県仙台市にある東北学院大学博物館と協力して行うことになりました。両大学は、キリスト教主義を建学の精神とする大学としてキリスト教文化の研究活動、さらには東北と九州という地域に根ざした活動にそれぞれ取り組んできました。そこで、お互いの地域でそれぞれの館の活動をご紹介するため、お互いの所蔵品を交換して展示するという初めての試みを行っております。つまり、今回は、それぞれの資料で構成された2つの特別展を同時開催することとなりました。

当館は、多数所蔵していますキリスト教関係の資料を展示させていただきます。そのなかでも、キリスト教の源流であるユダヤ教関係の資料と日本における禁教時代の資料を特色として、キリスト教のことを幅広く紹介できる展示となっております。

また、今回はそれぞれが博物館学芸員過程を養成する機関として、学生たちが参加して特別展を作り上げることを試みています。展示企画において学生に参加してもらい、学生を中心とした特別展の関連イベントを開催するなどし、相互交流と実践的経験の場となることを目指しました。

以上のような初めての試みは、これまで積み上げた成果のうえになりたっており、これからも大学博物館としての意義を感じていただける特別展を続けていかなければと思います。これからも皆様の暖かいご支援を賜ることができるよう、館として活発な活動に取り組んで参りたいと存じます。

末筆ではございますが、企画にご賛同いただきました東北学院大学博物館館長とご担当者の皆様、そしてご協力いただきました関係各位に心より御礼申し上げます。

2015年6月12日

西南学院大学博物館

館長

宮崎克則



# Nexus展 合同開催概要

本展覧会は西南学院大学博物館が2011年から行ってきた大学博物館共同企画シリーズの第5弾で、今回は東北学院大学博物館と連携した事業である。“社会に開かれた大学の窓口”を具現化するために、本学博物館では、一昨年度から本格的な巡回展をおこなってきた。今回は、新しい取り組みとして、異なるふたつのテーマをもった特別展を両会場で同時開催することとなった。

本事業の共通タイトルとして、“Nexus(連携、絆)”と掲げている。この言葉の選択には、東北学院大学博物館と協働することをふまえて、次のような思いがこめられている。ひとつには、大学博物館同士の「連携」。そして、もうひとつの「絆」は、2011年に日本を襲った東日本大震災の復興に取り組んでいくなかで、日本中で心に刻まされた言葉であり、本事業の本質である。

東北学院大学博物館は、文化財レスキューの活動を行い、同地における震災の復興に重要な役割を果たしている。こうした成果を広く発信するために、西南学院大学博物館を会場にして「東日本大震災と文化遺産－被災と復旧、そして文化創造へ」と題して、その活動を紹介する。大震災から4年がたった今、震災を風化させないため、九州という東北から離れた地で、その活動実態と現状を知ることができる。

そして、東北学院大学博物館では、「キリスト教の源流と東方伝播－受容と禁教、そして解禁」と題して、西南学院大学博物館の所蔵資料からキリスト教史を紹介する。両大学はキリスト教を建学の精神としており、さらに、仙台市は慶長遣欧使節を派遣するなど、歴史的にみても日本キリスト教史における重要な地である。ここに、西南学院大学博物館が所蔵するキリスト教関連資料を展示できることは、学生教育はもとより、生涯学習においても意義のあるものと考えている。

本事業を通じて、本学博物館が東北の地において少しでも貢献できる取り組みになれば幸いである。そして、両館の特色をそれぞれの地域でご紹介することで、地域貢献を図るとともに、学芸員養成をおこなう大学として教育プログラムをあわせて行い、実践力を兼ね備えた展覧会となることも目指していくものとする。

## 【会 期】

6月12日(金)～8月4日(火) in 西南学院大学博物館会場

「東日本大震災と文化遺産－被災と復旧、そして文化創造へ」

6月12日(金)～8月6日(木) in 東北学院大学博物館会場

「キリスト教の源流と東方伝播－受容と禁教、そして解禁」



# 目次

ごあいさつ

東北学院大学博物館 館長 辻 秀人 2

西南学院大学博物館 館長 宮崎 克則 3

合同開催概要 4

目次・凡例 5

## 東北編(会場：西南)「東日本大震災と文化遺産－被災と復旧、そして文化創造へ」

開催概要 8

### 1章 ミュージアムの復興に向けて

－学生主体による「石巻市鮎川収蔵庫」の文化財レスキュー活動－ 9

### 2章 伝統工芸の復興に向けて

－国の伝統的工芸品「雄勝硯」と国産天然スレートの現在－ 21

### 3章 近代建築の価値再発見に向けて

－仙台の宣教師館「デフォレスト館」(国の登録有形文化財)の調査－ 29

主な展示資料の紹介 35

出品目録 38

## 凡例

◎本図録は西南学院大学博物館春季特別展「Nexus」展〔西南学院大学博物館会場－会期：2015年6月12日(金)～2015年8月4日(火)「東日本大震災と文化遺産－被災と復旧、そして文化創造へ」、東北学院大学博物館会場－会期：2015年6月12日(金)～2015年8月6日(木)「キリスト教の源流と東方伝播－受容と禁教、そして解禁」〕開催にあたり、作成したものである。

◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。

◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することは認めない。

◎本図録の全体編集は内島美奈子(本学博物館学芸研究員)がおこなった。資料解説については、東北学院大学博物館所蔵資料を加藤幸治(東北学院大学文学部准教授)、西南学院大学博物館所蔵資料の1～2章を内島、3～4章を安高啓明(熊本大学文学部准教授)が担当した。英文翻訳ならびに編集補助には、山尾彩香(本学博物館学芸調査員・本学大学院国際文化研究科博士前期課程)、阿部大地(同上)、吉岡香澄(同上)、筒井晴佳(同上・本学英文学部)、唐島慎一(同上・本学国際文化学部)、野藤妙(同上・九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程)があたった。

## 西南編(会場：東北)「キリスト教の源流と東方伝播－受容と禁教、そして解禁」

開催概要	40
1章 キリスト教の起源－ユダヤ	41
2章 キリスト教の広まり	47
3章 日本キリスト教史－光と影	53
4章 禁教解禁に向かって	61
出品目録	68
論考 東北学院大学博物館の名品 東北学院大学文学部 准教授 加藤 幸治 東北学院大学博物館 学芸研究員 熊谷 明希	71
東北におけるキリスト教布教と禁教 熊本大学文学部 准教授 安高 啓明	73
フィリピンにおけるキリスト教伝来とキリスト教美術の展開 西南学院大学博物館 学芸研究員 内島美奈子	77
イベント情報	79

# nexus

2015年度 春季特別展

絆  
・  
連携

大学博物館共同企画V



東北学院大学博物館

東日本大震災と文化遺産－被災と復旧、そして文化創造へ





## 開催概要

東日本大震災から4年あまりが経過しました。東北の被災地では復興にむけた様々な動きが、現在進行形で動いています。震災復興は、住宅や港湾、市街地等のインフラや、産業の復興といった、いわば目に見えるかたちの復興が中心で、しばしば復興の実感や遅れが話題となります。一方、歴史や文化を生かした文化創造や、帰属意識、地域への愛着といったアイデンティティにかかわる部分は、かたちに表れにくく議論に上ることは多くありません。

有形文化財や博物館のコレクションは、歴史や文化をかたちとして残すものです。また人々の手仕事や民俗芸能等の無形の文化財も、モノづくりの実践や上演をとおして、歴史や文化をかたちとしてあらわすものです。震災復興において、こうした文化遺産を復旧する目的は、単に貴重な資料を復旧するためではありません。歴史と文化をかたちとして示すものの復興を手掛かりに、再び歴史の歩みをはじめめる地域の文化を創造していくきっかけを提供するものとならなければなりません。そこに被災地におけるミュージアムの役割があります。

今回の展示では、第一章では地域博物館のコレクション、第二章では伝統工芸の技術、第三章では大学の保有する歴史的建造物という、三つのタイプの文化遺産をとりあげます。それぞれの復興にむけた取り組みにおいては、その文化遺産の復旧はもちろんですが、被災地の歴史と文化を再認識することができます。それぞれの復旧の取り組みは、今後の被災地における文化創造のための素材づくりの過程でもあります。また、そこに大学生が主体的に関与することで、博物館単体ではできない文化創造活動と交流空間の創出を促すことができます。

今回の展示の内容は、東北学院大学博物館の取り組みと、被災した学内の文化遺産の調査プロジェクトの成果をもとに構成しています。これをひとつのたたき台として、九州のみなさんには文化遺産の防災はもちろんのこと、災害が起きたときに被災地の大学とそこに学ぶ大学生がどのように文化遺産に関する活動ができるかを考えていただければと思います。



東北学院大学土樋キャンパス



# ミュージアムの復興に向けて

## I

—学生主体による

「石巻市鮎川収蔵庫」の文化財レスキュー活動—

For the Revival of Museums : Rescuing Cultural Heritages by Students in the Ayukawa Strage of Ishinomaki City

東日本大震災では、地震と津波の直接の被害によって多くのミュージアムや収蔵施設が壊滅的な被害を受けました。東北学院大学博物館は「石巻市鮎川収蔵庫」で被災した約4000点の考古・民俗資料を受入れました。学生たちの手による泥落としや脱塩、修復、整理作業を経て、現在は仮収蔵庫でミュージアム復活の日を静かに待っています。展示では保全作業とともに、学生たちが被災地で取り組んでいる移動博物館活動もあわせて紹介します。

The shock of the earthquake and the following *tsunami* devastated many museums and storages at the time of the Great East Japan Earthquake. The Tohoku Gakuin University Museum accepted about 4,000 of disaster-stricken collections, archaeological resources and folk materials from the Ayukawa Storage of Ishinomaki City ( 'Ishinomaki Ayukawa Shuzoko' ) . The students wiped the mud off, demineralized, restored and classified them. At the present time, those collections are waiting for the reopening day of the museum in the temporary storage. We present the action of conservation and the project as a mobile museum in the stricken areas by the students.



東北地図



被災文化財の運搬作業



鮎川の位置



## ●全国から文化財の専門家が現地入り

2011(平成23)年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による東日本大震災では、多くの文化財や博物館が被害を受けました。震源地に最も近い牡鹿半島の突端に位置する石巻市鮎川では、石巻市鮎川収蔵庫に保管されていた民俗資料と考古資料、鮎川公民館に保管されていた町史編さん資料、おしかホエールランド等の捕鯨関係資料が甚大な被害を受けましたが、奇跡的にほぼすべての文化財が流失をまぬがれました。

収蔵庫内部の状況は極めて深刻でした。資料が海水で浮き上がって収蔵庫内で滞留し、奥へ奥へと押し込まれる圧力で大半が壊れてしまいました。また泥や塩分の影響やカビの被害もありました。こうした文化財は、地域の教育委員会で対応することは不可能です。そこで被災文化財等救援委員会による文化財レスキューの現場となり、東京・京都・奈良・九州の国立博物館と文化財研究所の研究員、全国から支援のために駆けつけた博物館学芸員、そして被災地の大学の研究者らがレスキュー隊として参加しました。



鮎川収蔵庫での文化財レスキュー活動

## ●大学博物館への搬送

収蔵庫の資料は、まず考古学者たちが散乱した土器や石器、化石などを採集し、次に文化財の専門家たちで民俗資料を回収、その後7回にわたって美術品専用トラックで仙台まで運搬されました。すべての資料を運び終えたのは10月下旬、およそ4000点の資料が被災地から東北学院大学へと搬出されました。



美術品運搬車で被災資料を大学に搬入する



## ●クリーニング

被災資料は、まず大学生によってクリーニングや殺カビ処理が行われました。津波で被災した資料は、腐敗やカビの影響によって非常に状態が悪いため、基本的には乾燥させながらブラシ等を用いてドライクリーニングを行い、陶磁器やガラス製の資料のみを水洗しました。学生たちは津波の汚泥と腐敗臭、そして再三にわたるカビの発生に悩まされながら、2年間かけてクリーニングを終えました。



クリーニング作業の様子

## ●記録

わが国では大規模な災害が度々くり返されてきましたが、被災した文化財をどのようにレスキューしたかという記録はこれまでほとんど残されていませんでした。東北学院大学の現場では、日々の活動を「活動日誌」に記録し、資料状態の変化を「カルテ」に記録しています。「カルテ」は、文化財の専門教員が資料の状態を診断して作業内容を確定してカルテに記入、大学生たちはカルテの指示によって作業を行います。これによって、いわば文化財の素人である大学生が、一度に30人程度作業にあたることができ、人海戦術でのクリーニングが可能となりました。

文化財レスキューカルテ (石巻市鮎川収蔵庫)	
<input type="checkbox"/> 写真撮影	<input type="checkbox"/> データベース登録
<input type="checkbox"/> 写真写付	作業番号 436- <input type="text"/>
行け札の有無 <input type="checkbox"/> 有り <input checked="" type="checkbox"/> 無し 重要な有無 <input type="checkbox"/> 有り <input checked="" type="checkbox"/> 無し	名称 _____ 所在地 _____
<b>現 状</b> 【材質】 <input type="checkbox"/> 単体 <input checked="" type="checkbox"/> 集合体 01. 金属(鉄・銅・アルミ・合金・その他) _____ 02. 植物(樹皮・ワラ・竹・その他) _____ 03. 木 _____ 04. 紙 _____ 05. 糸 _____ 06. 布 _____ 07. 漆 _____ 08. ガラス _____ 09. 陶器・磁器 _____ 10. その他(天然石(珪藻土)) _____ 【備考】 _____ 日付 (西) 11. 7. 27 担当者 かつ	<b>現 状</b> 01. 植物 02. カビの発生 03. 虫食 04. ドロ・砂・ほこりの付着 05. 腐敗 06. 変形 07. 腐敗・崩 08. 剥離 09. その他( ) _____
<b>処置内容</b> 水による洗浄 <input checked="" type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 前記内容は総括的であり、追加した作業のありなし、本館には予備として対応して対応 日付 (西) 11. 7. 28 担当者 菅野 佑太郎 日付 (西) _____ 担当者 _____	
<b>処置後の状態</b> 一次洗浄による状態の変化 <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 二次洗浄の必要 <input type="checkbox"/> 有 <input type="checkbox"/> 無 保管場所 (収蔵庫・倉庫・その他) _____ 日付 (西) _____ 担当者 _____	

文化財レスキューカルテ

## ●二酸化炭素殺虫処理

木製品の多くは深刻な虫害も受けていました。津波で被災してからレスキューされるまでのおよそ2か月半にわたって、文化財は半ば野晒し状態だったからです。しかし、津波の汚泥と殺虫のための薬剤が、どのような反応をするかは未知数でしたし、大量の木製品を殺虫するだけでも莫大な経費が掛かります。そこで採用されたのが二酸化炭素殺虫処理です。これは、密閉されたテントの中に二酸化炭素を充満させ、資料の中に住みついている虫を枯死させる作業で、特殊な資格を必要としない作業です。東北学院大学では、国立民族学博物館の指導のもと、大学生たちがこの殺虫処理法を行ってきました。



二酸化炭素殺虫処理の作業

## ●脱塩処理

津波の被害を受けた資料は、塩水に浸っていたため、塩による劣化を防ぐために脱塩作業を大学内で進めています。脱塩作業は、まず資料を水に浸け、塩分濃度が下がるまで1～2週間ごとに水を取り換えます。そして塩分濃度が20ppmの数値まで下がったら、水から引上げて乾燥させます。最後に、豚毛ブラシで錆取りをし、オリーブオイルで防錆のためのコーティングをします。こうした作業は、保存処理の専門家の指導を受けながら、学生自身が行うため、文化財保全の勉強にもなっています。



脱塩中の鉄製民具



防錆処理



滑車・マンボウ突き具(脱塩・防錆済)



火熨斗とアイロン・捕鯨用具(脱塩・防錆済)



## ●台帳整備

クリーニング作業の過程では、資料の管理を「文化財レスキューカルテ」で行ってきました。しかし、資料は博物館学芸員が使用する「資料台帳」のかたちで分類整理されないと、被災資料返却後に現地の学芸員が資料を管理することができません。保全作業がおおかた終わった段階で、資料は一点につき一枚の「資料台帳」の管理に移り、民俗資料の分類表に基づいて区分されます。

## ●民具の修復

台帳整備は、形のはっきりと残っている資料から優先的に行いました。その台帳化を終えると、バラバラの破片が残りました。そこから津波とともに流入した瓦礫と判断できるものを除き、残った破片を接合して修復する必要がありました。しかし、あまりに断片的な棒や木切れ等が多かったので、民具研究者とともに「はたらく棒」というイベントを開催しました。これは、一見すると“用途不明の棒”に見えるものも、かつては家事や生業などの何かの労働に使われていたはずの「はたらく棒」だったと認識を変え、一点ずつ復元していこうというイベントでした。このイベントによって数十点の民具が元のかたちを表し、「資料台帳」に登載することができました。



「はたらく棒」イベントで民具を修復

## ●仮収蔵庫への移送

震災から4年間、大学生たちによるクリーニング・殺カビ・二酸化炭素殺虫・脱塩の作業を通じて、被災資料の劣化を食い止める保存処理作業と修復が進められてきました。2015(平成27)年2月、これらの作業がすべて終了し、ようやく石巻市内の仮収蔵庫に返却することができました。被災資料は、新しいミュージアムの建設までしばらくそこに保管されることになります。

## ●文化財レスキューから文化創造へ

文化財レスキューは資料をきれいにしてお返しすれば終わりではありません。被災地で被災文化財を通じた博物館活動を継続しながら、地域において文化財が今どのような意味をもっているのか、それを通じてどのような新たな文化を創造していけるかを考えることが重要です。東北学院大学では、2012年度から2014年度までで計10回にわたり、被災文化財や古写真を被災地の石巻市や仙台市で展示したり、文化財を楽しんでもらったりするためのイベントやワークショップを開催してきました。

最初は、もともと資料が保管されていた被災した石巻市牡鹿公民館を会場としましたが、翌年にはその建物も取り壊されたため更地に TENT を建てての移動博物館として実施しました。仙台市内では文化施設であるせんだいメディアテークを会場に、沿岸部から避難して生活している人々を対象に展示を行い、2015年には大規模な復興住宅団地を建設中の石巻市蛇田地区にある商業施設イオンモール石巻店を会場として展示を行いました。



2012年開催「文化財レスキュー展in鮎川」



2013年開催「牡鹿半島の暮らし展in仙台」





## ●展示会場での聞き書き

展示会場では、民具を前に語られる昔のくらしのエピソードについて、学生が聞き書きを行ってきました。これまでに1000名を超える方々からお話をうかがいました。内容は、捕鯨、漁業、生活、農業、養蚕や、かつての町の賑わい、年中行事の思い出など、かつてそこにあった普通のくらしの風景を彷彿とさせるものばかりです。また、石巻市鮎川の特別養護老人ホームやデイサービスセンターにも、民具を持ち込み、入所者・通所者の皆さんは昔のお話に花を咲かせてくださいました。こうした聞き書きは、単に民具のバックデータのみならず、被災後の今を生きる人々にとって民俗資料がどのような意味をもっているか、あるいはそこから思い出されるくらしの風景に、どのような価値を見出していくかを示すものでもあります。

民具や古写真をよりどころとして思い出されるくらしのエピソードは、かつてそこにいた自分と、被災後の今を生きる自分、復興していく新しい街で生活を営んでいく自分をつないでいく結節点としての役割を担っていくのではないのでしょうか。大学生が主体となって行うこのような活動を通じて、文化財の持つ新たな意味について、ひき続き考えていきたいと思っています。



2014年開催「牡鹿半島・海のくらしの風景展in鮎川」



2014年特別養護老人ホームでの聞き書き





2014年開催「牡鹿半島・海のくらしの風景展in石巻」



2014年開催おしか鯨祭りでのブース出展



2015年開催「牡鹿半島・思い出広場」





文化財レスキュー期

ポスト文化財レスキュー期

大規模災害・ミュージアムの被災

資料の安定化⇒仮収蔵

ミュージアムの復興

## すくう

文化財レスキュー隊による資料の捜索・救護  
盗難防止・資料保全のための一時保管先への移動  
真空凍結乾燥等の劣化進行防止の措置

## のこす

被災状況の記録とドキュメンテーション等の簡易処置  
殺虫処理・脱塩処理等の保全作業  
破損した部品の発見・接合  
写真撮影・台帳目録整備  
仮収蔵庫整備までの一時保管と経過観察

## つなげる

被災地での移動博物館やワークショップ等の活動  
地域の様々なアクターの協働による活動の基盤形成  
被災経験をふまえた過去の再解釈の場の創出  
域住民による文化資源の再発見  
文化創造活動によるレガシー場の場の創出

## かたまりあう

過去と現在のつなぐ、地域のくらしのイメージの形成  
地域のアクターにおける大切にしたいものの再発見  
レスキューされた文化財の意味創出  
市民参加型の博物館活動の継続  
学生やボランティア、地域への共感者の主体的な活動  
復興する地域におけるミュージアムの構築

## 復興のキュレーションのイメージフロー



## コラム 「江戸時代の旅～金の花咲く山を訪ねて～」

東北歴史博物館学芸員 今井 雅之

東北地方太平洋側、宮城県の牡鹿半島の先には金華山という名の島が浮かんでいる。今回はこの島をめぐるイメージを題材として、江戸時代の旅のありかたについて考えてみたい。

さて、この金華山であるが江戸時代から、さらに言えば奈良時代から有名な山であった。江戸時代前期の俳諧師として有名な松尾芭蕉の紀行文、『おくのほそ道』の一節から話を始めよう。

十二日、平和泉と心ざし、あねはの松・緒だえの橋など聞き伝て、人跡稀に雉兎芻蕘の往かふ道そこともわかず、終に路ふみたがえて、石巻といふ湊に出。「こがね花咲」とよみ奉たる金花山、海上に見わたし、数百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつづけたり。

芭蕉は平泉へ向かう前に、あねはの松・緒だえの橋といった歌枕の地を訪ね歩き、石巻へ出た。ここで注目したいのが「こがね花咲」とよみたてまつりたる金花山」という部分である。海上に浮かぶ島を見渡して、「これがかつて「こがね花咲く」と詠まれた金花山なのだなあ」と感じ入っている様子が目に浮かんでくる。

それでは、芭蕉が思い起こしていた「こがね花咲く」とはどのような歌なのであろうか。その出典は奈良時代の『万葉集』にまでさかのぼる。

天皇(すめろき)の 御代(みよ)栄(さかえ)むと 東(あずま)なる 陸奥山(みちのくやま)に 金(くがね)花咲(はなさ)く  
(天皇の治世が栄えるようにと東の陸奥山に金の花が咲く)

歌の作者は大伴家持である。昔、東大寺の毘盧遮那仏像、通称奈良の大仏は金色に光っていたが、それに使われた金の多くは東北で産出したものであった。『続日本紀』には次のような記述がある。

天平廿一年二月丁巳。陸奥国、始貢黄金。於是奉幣、以告畿内七道諸社。  
(天平21年2月丁巳の日。陸奥国がはじめて金を献上した。そこで神に供え、全国の神社に幣帛を奉って報告した。)

この出来事をきっかけとして「こがね花咲く」の歌が詠まれたことになる。それ以降、黄金の国=東北というイメージは和歌を通じて江戸時代の旅人にも共有されてゆく。そして、金の花が咲いた東なる陸奥山とは、牡鹿半島の先に浮かぶ金華山だとみなされてゆくのである。

金華山を眺め万葉の時代に思いを馳せていたのは芭蕉だけではない。江戸時代後期に東北を旅した落語家、船遊亭扇橋も紀行文『奥のしをり』に次のように書き残している。

金華山辨天 陸十三里、海上十七里 海中の島也  
聖武帝天平二十年自當山始メて出黄金を國司より京帥ニ献之、金海鼠名物也、山の奥に水晶の大石有り、高サ五丈六稜三抱と申すこと也、仙人澤其外見所多シ、山中一面に金色砂也、土ばくというたくひなるへし、海の岸より海中をのそけハ水中一面に金色也  
瞳の奥に 咲くや黄金の 花の山 いつの頃より ひらきそめけん  
(瞳の奥に咲いたよ黄金の花の山が いつの頃から開き初めたのだらうか)

金のなまこや金の砂など、黄金のイメージは扇橋にも共有されていることが明らかであろう。そしてなにより注目すべきは最後の歌である。「黄金の花の山」として『万葉集』の件の歌が意識されているのみならず、その花が咲いた当時の景色を瞳の奥に思い描いている。つまり扇橋は金華山を目の前に眺めつつ万葉の時代に思いを馳せ、現在の景色に過去の景色を重ね合わせていたのである。

言うまでもないが、現実には金で埋め尽くされているような島など存在しない。江戸時代中期の地理学者、古川古松軒は『東遊雑記』の中で、実際に金華山に渡っている地元の長に話を聞き、次のように記している。

他国という所は、この嶋山には黄金満ち満ち、参詣の山道砂金なりということは、甚だしき虚説にして、山中においてはさらに金色の石なし。



つまり扇橋が眺めた金華山は、目の前に見えた景色としては普通の山であった。しかし彼は瞳の奥に黄金の花の山が咲くのをみたのである。目の前の景色だけを見るのではなく、万葉の時代に思いを馳せ、過去の景色を思い描くというのが扇橋の、ひいては江戸時代の旅のありかたであった。

この旅のありかたは、現代の観光のありかたとは少々趣が異なることに気付く。観光ガイドブックに載っている写真と同じ景色を見て満足する。それも一つの旅かもしれない。しかし東北地方沿岸、金華山のある牡鹿半島には東日本大震災前のガイドブックに載っていた景色はもうないのだ。そう考えたとき、過去の景色に思いを馳せ、目の前の景色に重ね合わせるという江戸時代の旅のありかたは非常に豊かなものと思えてくる。それは必ずしも万葉の時代にまで遡る必要はない。一昔前、その地域が楽しく輝いていた時代でもよい。目の前に見える景色だけにとらわれるのではなく、過去の景色にも思いを馳せるとき、東北への旅はより豊かなものになるだろう。過去の景色、地域が輝いていた時代のくらしを学ぶことは、とても楽しい旅の準備である。

## 参考文献

- 宇治谷孟現代語訳 1992『続日本紀(中)』講談社  
 佐竹昭広ほか校注 2015『万葉集(5)』岩波書店  
 船遊亭扇橋 1928『復刻 奥のしをり アチック ミュージアム彙報 第二十一』アチック ミュージアム  
 芭蕉 萩原恭男校注 1979『おくのほそ道』岩波書店  
 古川古松軒 大籐時彦解説 1964『東遊雑記一奥羽・松前巡見私記 東洋文庫(27)』平凡社



金華山遠景



陸前国金華山新景明細図(大正二年・黄金山神社社務所発行)



# II

## 伝統工芸の復興に向けて

### 一国の伝統的工芸品 「雄勝硯」と国産天然スレートの現在

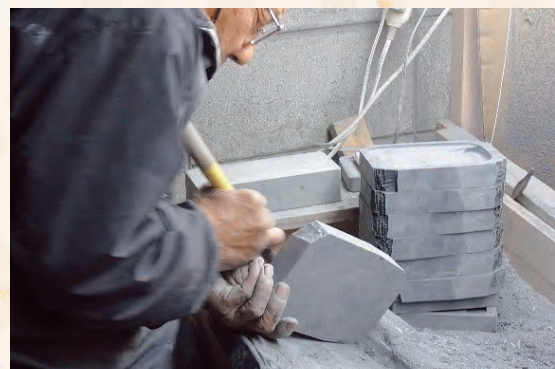
For the Revival of Traditional Crafting: The State of Japanese Traditional Crafting, “Ogatsu-suzuri” and Domestic Natural Slate

石巻市雄勝町は東日本大震災の津波で、極めて甚大な被害を受けました。ここは、国の伝統的工芸品「雄勝硯」の産地であり、東京駅など日本を代表する近代建築の屋根材に用いられた国産天然スレート材：玄昌石の産出地です。職人たちは、道具を拾い集めることから再出発し、様々な支援を受けて仮設の作業所や事務所で製作を始めています。現在は、クールジャパン海外戦略にも事業を展開し、産地復興への道の模索が続いています。

Ogatsu ward in Ishinomaki City suffered enormous damage from the *tsunami*, caused by the Great East Japan Earthquake. This area is famous for the traditional craft work, Ogatsu Inkstones (‘Ogatsu suzuri’), which made from *Genshoseki*, a local stone material. Moreover, this stone, known as the natural slates, is used for roof materials of Japanese modern architecture, for instance Tokyo Station. Picking up their tools means the beginning of revival for craftsmen. Now they make the products in the temporary workplaces or offices with various reconstruction assistances. We try to expand business through the global strategy ‘Cool Japan’ and continue to find a way to recover the regional industry.



東北地図



被災地での雄勝硯製作風景



雄勝の位置

# 雄勝石の利用

## ●プレートの移動によって露わになった地層

宮城県石巻市雄勝町は硯や石盤、天然スレート等に加工される良質な雄勝石の産地として古くから知られてきました。原石は、二～三億年前にあたる北上山系登米層古生代上部二畳紀の黒色硬質粘板岩で、その性質は石目に沿って薄く板状に剥離する性質があります。2011(平成23)年に発生した東北地方太平洋沖地震は、北アメリカプレートの下に太平洋プレートが沈み込む境界部で発生しましたが、このプレートの移動の運動は長い年月をかけて地底奥深い雄勝石の地層を押し上げてきました。そしてその地層が露わになった背斜面から採掘することができるのです。この粘板岩の石脈は雄勝半島から登米、唐桑へと延びています。

## ●広範な雄勝石の利用

古生代から中生代にいたる年代の違いや生成条件の違いによって、その色や質はさまざまです。三陸に産する粘板岩は、工芸品としての硯から身の回りの積み石まで、用途に応じて使い分けられています。例えば、碑石や建材に用いられる砂質の粘板岩は「井内石」と通称され、またスレートに用いられる灰色の粘板岩も産地によって「女川石」や「登米石」などと呼ばれることもあり、雄勝で硯と天然スレートの石材として採掘される石は雄勝石として知られています。また、石肌の美しいものは神社の鳥居や扁額、橋梁に用いられ、端材は斜面の階段や畑の石積みなどにも何気なく用いられています。



玄昌石の埋蔵する鉱脈が露出する斜面





板碑への利用



扁額への利用



石垣への利用



屋根材への利用



雄勝石の由来を記した板碑の銘文から作成された「玄昌石の記」(明治~大正期)



# 被災と復興状況

## ●被災

平成23年3月11日、宮城県石巻市の東南東沖130kmの海底を震源として発生した東北地方太平洋沖地震によって、10メートル以上の大津波が沿岸部の広範な地域に襲来しました。雄勝湾で15メートル以上の高さとなった津波によって、雄勝硯の生産地である雄勝の町はほとんどが流失してしまいました。この震災によって、碎石や硯の生産の関係者の多くが被災し雄勝硯ミュージアムも壊滅的な被害を受けました。雄勝浜に隣接する明神地区に所在した加工工場等もすべて流失しました。

## ●復興

現在、雄勝では組合関係者と採石・硯生産関係業者らの並々ならぬ努力による、雄勝硯の生産地としての復興の途上にあります。実は、雄勝が津波の被害を受けたのはこれが初めてではありません。明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波、東日本大震災津波のすべてで、雄勝は甚大な被害を受けましたが、雄勝石を使った産業はそのたびに復活し、さらに新たな販路を開拓するなどして困難を乗り越えながら発展を遂げてきたのです。



雄勝硯ミュージアム(2010年)



雄勝硯ミュージアム(2011年)



被災した常設展示室(2011年)



復興市・雄勝クラフトフェスタ(2012年)



# 現代の雄勝石加工品

東日本大震災以降、雄勝硯生産販売協同組合が力を入れている雄勝石を使った工芸品は、従来からの硯と屋根材としてのスレートに加え、伝統工芸品等を活用したクール・ジャパン製品の海外展開として、雄勝石製の石皿です。欧米向けの新たな販路開拓とともに、新たな商品開発に積極的に乗り出しています。

これらは雄勝石をめぐる在来技術を最大限に応用したものとなっています。硬質で均質な原材料を整える採掘加工技術、均等に剥離させながら同じ規格の板石を作るスレート加工技術、硯の仕上げ技術を応用した表面のコーティング技術などが使われ、これらの製品は作られます。

ヨーロッパでは、艶消しの真っ黒い皿というものは存在せず、またシンプル・モダンなデザインが好評です。加えて世界無形文化遺産に「和食」が登録され、ヘルシーで装飾的な日本食がブームとなっていることも追い風となって、大きなインパクトを与えています。

伝統技術を応用した現代のモノ作りへの挑戦は、震災を経てさらに意欲的なものとなっています。

## Tableware

In recent decades, Ogatsu Stone's 600 years of tradition and craftsmanship have been finding new expression in tableware.

The slate's silky texture, waterproof quality and high retention of temperature—both heat and cold—make Ogatsu Stone a perfect material for tableware, enhancing the beauty and taste of any food.

In the near future, Ogatsu Stone products are set to expand, going beyond tableware and introducing new lines of interior products that complement a variety of situations in contemporary life.



Round Slate Plate 210φ×6mm



Rectangular Slate Plate with Foot 230×140×6mm



Cutlery Rest 90×20×15mm



Octagonal Slate Plate 210×210×6mm



Multi-purpose Slate Plate (set of 4) 210×210×6mm

海外向けの雄勝石を用いた皿等のパンフレット



## ●雄勝石がスレート屋根になるまで

雄勝スレートは、国の伝統的工芸品に指定されている雄勝硯の材料と同じもので作られます。職人はまず山を見て鉱脈がどのように通っているかを見定め、良い石材の埋まっている場所の見当をつけて石を掘り出します。掘り出した石はふもとの加工場に運び込み、石の目に逆らわないように小さく割っていきます。この時に硯に適したものとスレートに適したものを選び分けていきます。さらに薄く割って加工したものが、スレート屋根の材料となり、スレート屋根葺きの職人の手によって屋根に葺かれています。



01 採石・玄昌石が露呈した部分から鉱脈を読み取る



02 採石・表面の風化した石を除けると質の良い石が現れる



03 採石・掘り出した石を石槌と楔、矢などを使って板状に割る



04 加工・石を素材に合わせて石を切っていく



05 水と砂をかけながら、石の表面を平滑に研磨していく



06 加工・小さく割った石に打撃を加えて割って薄く加工する





07 屋根葺き・パターンを考えながらスレートの形を決めていく



08 屋根葺き・押切で石を削ってスレートの形を整える



09 屋根葺き・先の尖った専用の工具で釘を打つ穴をあける



10 屋根葺き・色味の合うスレートを選りながら釘で打ちつけていく



11 屋根葺き・屋根や壁など様々なパターンを作ることができる



12 スレート屋根の完成

## コラム 「ホタテ養殖の復興の現場から」

東北学院大学大学院研究生 小山 悠

宮城県石巻市雄勝町はリアス式海岸で有名な三陸沿岸南部の雄勝半島に位置していますが、山地が多いために新田開発は殆ど行われず、カツオ・マグロ漁業の基地である雄勝漁港を中心としてカツオの一本釣りやそのカツオの餌となる沿岸漁業としてのイワシ漁などが行なわれてきました。

1960年代に入ると、この雄勝町をはじめとする三陸沿岸ではホタテの養殖が試験的に始められることとなります。筆者は雄勝町内の一漁村である立浜地区で震災後から調査をしてきましたが、雄勝町で最初にホタテ養殖がはじめられたのは1963年からという話を聞くことができました。導入の経緯としては、当時塩釜港に入港していたサンマ漁船の乗組員に雄勝町出身者や北海道の出身者が乗船しており、それぞれの船員を塩釜市内の回船問屋が世話をしていました。その回船問屋が問柄を取り持って、北海道オホーツク海側に位置する常呂漁港から親指大のホタテの稚貝を雄勝町へ持ってきて、金網カゴに入れて2年育ててから出荷するという養殖技術が培われてきたのです。これは大規模な取引のある築地市場を視野に入れ、ホタテの販路および消費拡大を狙っていたという見方もあります。高水温によるホタテの死滅や、北海道からの輸送時の品質確保の問題など、さまざまなトラブルも起こったのですが、漁師たちの雄勝湾の漁場の狭さを逆手にとった生育システムの構築などの工夫もあって、50年ほどをかけて雄勝産のホタテとして有名になりました。そういった数々の困難を乗り越える工夫のなかでブランド力を確立してきた雄勝のホタテでしたが、あの震災によって大きく崩されてしまいます。

東日本大震災では船やホタテの養殖棚も流出、あるいは損壊という被害が起きました。この雄勝町のホタテ養殖の復興を見ていくなかで注目したいのが数々の支援の受け入れ、または漁師たちが共同で行う生産システムの考案でした。まず、震災が発生してから5ヶ月後には町内の漁師や起業家を中心となって合同会社が設立され、養殖から生産、さらに加工や出荷までも自らの会社で行ない、漁業の6次産業化の側面をもって注目されました。そのほかにも他県の中小企業連合の社長らが中心となって結成したボランティア支援団体は雄勝町の漁師と協力し合っ、漁港や集落のがれき撤去を震災発生から2ヶ月後の2011(平成23)年5月から行なわれました。またこれらの支援がきっかけとなり、船や機械の修繕費を捻出するため、全国に1口1万円の募金を呼びかけ、港湾設備が復旧した後にワカメやホタテガイを支援者に贈るというプロジェクトも行なわれたのです。これらの様子から分かることとして、雄勝町のホタテ養殖業はスピード感ある状況のなかで復興に向けて進んできたということが言えます。

2015(平成27)年現在、港湾設備の復興は目まぐるしいものがありますが、災害危険区域に指定された場所もあり、居住空間の復興とのズレが生じている部分が見えることもたしかです。しかし、現地で震災後もホタテ養殖業に従事する漁師たちを見ていると、震災以前とも変わらない作業の様子で行なわれていることが分かりました。11月には北海道から稚貝が運ばれてきて、それらを雄勝の海に入れる「耳吊り」という作業が行われますが、集落に家々が少ないことから、作業がはじまる未明の時間帯も相まって被災地の暗い印象も受けてしまいます。しかしながら、そこでは雄勝のホタテ養殖業が歩んできた時間のなかで培われてきた知恵や工夫は震災以前とほとんど変わっておらず、復興の混乱のなかであっても脈々と受け継がれていく前向きな姿を感じるのです。





# 近代建築の価値再発見に向けて

## III

### －仙台の宣教師館「デフォレスト館」

### （国の登録有形文化財）の調査－

For the Rediscovery the Value of the Modern Architecture : Investigation into “Deforest Building”: Western-Style Building for Missionaries in Sendai City, which is Registered for Tangible Cultural Property in Japan

東北学院大学土樋キャンパスには、国の登録有形文化財の建造物群があります。そのひとつ明治の洋館「デフォレスト館」は、東日本大震災の揺れで大きな被害を受けました。震災後、保存修理のための調査が行われ、技術や意匠の特色や建築当初の姿が明らかになってきました。この宣教師館の屋根には、第二部で紹介した美しい雄勝スレートが葺かれおり、今後の修理過程においては、スレート葺き技術継承の場としても期待されています。

There is a group of buildings designated as a registered tangible cultural property of Japan in Tsuchidoi campus of Touhoku-Gakuin University. One of them, the European-style building “Deforest building” was built in Meiji era. Suffered big damage by Great East Japan earthquake, the building was investigated for preservation repair.

As a result, it showed the features of both technique and design and the original figure, for example the roof of that had tiled with beautiful Ogatsu slates. On the process of repairing, it is expected that this repairing project become a place where the slate tiling technique is taken over.



デフォレスト館外観

## ● 瀟洒な外観のデフォレスト館

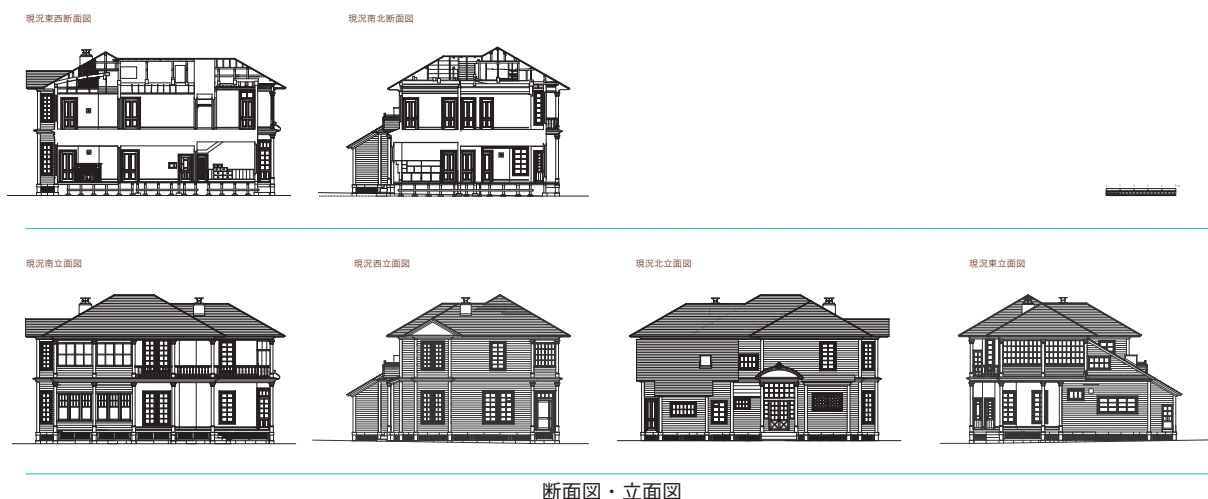
東北学院は、キリスト教伝道者育成を目的として1886(明治19)年に開校された「仙台神学校」にその源流をもちます。現在の東北学院大学土樋キャンパスには、明治、大正、昭和初期に建築された歴史的建造物が現在も残っていますが、そのひとつ「デフォレスト館」は、明治20年に建てられた瀟洒な外観が特徴の宣教師館です。

デフォレスト館の建築様式は、長崎や神戸など外国人居留地の住宅で使われはじめ、その後全国に広まった「コロニアル・スタイル」をベースとしており、ポーチや大きな窓、ベランダが特徴的です。デフォレスト館にも開放的なベランダやサンルーム、菱格子で装飾された天井など、その特徴を示すデザインが随所に見られます。

## ● 実は和洋折衷の建造物

ところが注意深く細かいところを見てみると、鬼瓦であったり、日本の在来工法である和小屋の構成が見られたりと、洋風の意匠と和の技術や意匠とが巧みにアレンジされた、和洋折衷的な建物となっています。これは、洋風のデザインを実現させるにあたり、実際に施工した日本の大工が自身の技術を適宜応用しながら造っていったことによるものです。

### デフォレスト館 現況 断面図・立面図



断面図・立面図





デフォレスト館外観

押川正義らによって設立された東北学院の普通部、同専門部をはじめ、東華学校、仙台神学校、宮城女学校(1886年、現宮城学院)、尚綱女学校(1892年、現尚綱学院)など、仙台には明治時代に複数のミッション・スクールが設立されました。これらに加え、市内に建設された教会などを拠点に数多くの宣教師が来仙し、活動していました。外国人記者の編集により、毎年外国人向けに発行された『ジャパニ・ディレクトリー』によれば、明治期にはのべ約160人もの宣教師関係者が仙台市内で活動していたことが分かります。

大正元年発行の「仙台市全図」には、外国人居留者の住居地が具体的に記されています。大正期の仙台市の地図には、東北帝国大学(現東北大学片平キャンパス)近くの広瀬川が蛇行する位置に、デフォレスト館を含めて少なくとも五軒の西洋館が建っていたことがわかります。市の中心部に主に日本人実業家の洋風建築が建ち、その周囲や周縁に大多数の宣教師たちが、短期間に引越しを繰り返しながら、教派ごとにある程度まとまって居住していた実態が明らかとなってきました。当時の仙台は、近代化とともに「宗教都市」とでも言えるような様相を呈し、多くの木造洋風建築が建てられていたのです。





最新版仙台市全図市街町村及番地入(1916(大正元)年・北の都社発行)  
仙台市全図

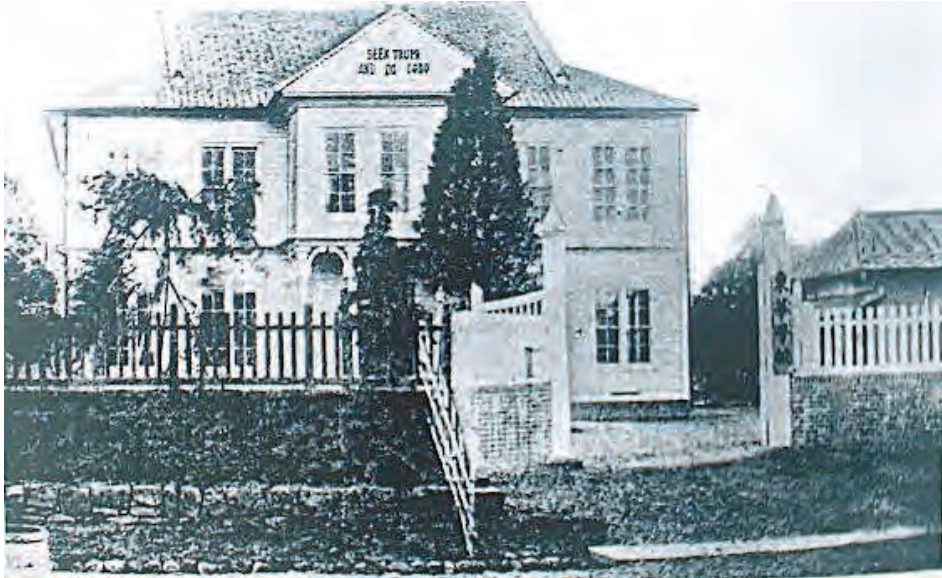


仙台市全図部分



同図の表紙





デフォレストが奉職した新島襄設立の東華学校

## ●東日本震災後の調査から

デフォレスト館は、東北地方太平洋沖地震の揺れの被害で、現在は立ち入ることができない状態です。震災後、修理と保存の方針を立てるため、また建造物そのものの価値について明らかにするため、研究プロジェクトが組まれました。この調査で、設計者は当時宮城県土木課の営繕技手として活躍していた「ウエダ」氏であることや、建築当初は日本瓦が葺かれていたこと、隣接して建つブラッドショー邸とともに発注されたことなど、様々な背景が明らかになってきました。

デフォレスト館は、同志社→在日本コングリゲーションナル宣教師社団→在日本リホームド宣教師社団→東北学院とその所有が変遷し、デフォレスト→ゲルハード→アンケニー→シップルが居住した後、東北学院の研究室や事務室として使用されてきました。記録に残っていない改造などもかなり行われたようですが、所有者や居住者が替わるタイミングで、様々な改修が行われたことは想像に難くありません。創建当初の姿のまま残っている建物も大変貴重ではありますが、この建物のように、その時その時の歴史を壁や天井に刻みつけながら現代まで使われてきた建物もまた貴重です。



デフォレスト館模型

東北学院大学工学部櫻井研究室作成

## コラム 「東北学院大学土樋キャンパスの登録有形文化財群」

東北学院史資料センター担当職員 星 洋和

東北学院大学は、学校法人東北学院が運営する教育機関の一つで、1949(昭和24)年に設立されました。その源流は、押川方義と宣教師W・E・ホーイによって1886(明治19)年に設立された仙台神学校で、東北学院に改称したのは1891(明治24)年のことです。現在の大学土樋キャンパス(仙台市青葉区)に校舎を構えるようになったのは1926年、当時は専門部が置かれていました。

土樋キャンパスにある建物のうち、デフォレスト館の他に登録有形文化財となっている建物は、東北学院大学本館(旧東北学院専門部校舎)、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂、東北学院大学大学院棟(旧シュネーダー記念東北学院図書館)があります(三件とも2014年12月19日に登録)。

大学本館は、本院の創立40周年にあたる1926年に竣工しました。鉄筋コンクリート造りの三階建てで、外観は当時アメリカで流行していたカレッジ・ゴシック様式と呼ばれる中世の城郭を意識したものになっています。校舎として利用されていた時には教室や図書室が館内に配置されていましたが、現在それらの部屋には大学の事務局等が配置されています。設計を担当したのは米国人建築家のJ・H・モルガンで、彼は後述する礼拝堂の設計も担当しています。

礼拝堂は1932(昭和28)年に竣工しました。名称に冠されている“ラーハウザー”は、礼拝堂建築にあたり多額の寄付をしたアメリカ人女性の名に由来します。カレッジ・ゴシック様式で、地下一階・地上二階建ての鉄筋コンクリート造り。堂内には、イエス・キリストの昇天の場面を描いた英国製のステンドグラスや、ドイツのベッケラート社製のパイプオルガン(設置当初は米国モラー社製)などが設置されています。また、堂内の階段の手すりには戦時中の金属回収による支柱切断の跡が残っています(大学本館の階段の手すりにもその名残が見られます)。

大学院棟は1953年に竣工。設計担当は山下寿郎設計事務所仙台支社で、鉄筋コンクリート造り。一見三階建てに見えますが、実際は六階建て(竣工当初は五階建て)になっています。本来、第二代院長D・B・シュネーダーの構想では、本館の西側に建つ「霊性の訓練」のための礼拝堂とセットで、東側に「知識の訓練」のための図書館を建てる計画でした。しかし、戦争などの諸事情から図書館の竣工だけが大幅に遅れ、戦後になってようやくシュネーダーの構想が実現しました。

デフォレスト館に加え、大学本館、礼拝堂、大学院棟は現在、国の登録有形文化財となっています。



東北学院大学



ラーハウザー記念東北学院礼拝堂



## 主な展示資料の紹介



### 1. 墨書人面土器

律令国家の東北支配の拠点であった多賀城跡近くで出土。平安時代の  
もので、人々が穢や病気をはらう水辺の祭祀に用いたと考えられる。  
(本資料について詳しくは71頁)

Face-marked pottery



## 2. おしらさま

農業や養蚕、馬の神として信仰されてきた東北独特な神像。  
1608(慶長13)年の紀年銘がある極めて古い資料。(本資料について詳しくは72頁)

Oshirasama (God)

## 3. 金華山祈禱札

津波で被災し、保全作業を行った民具。金華山黄金山神社で、  
祈禱を受けて授与される札で漁民の信仰を伝える資料。

Amulet





#### 4. 縄文土器片(後山貝塚出土)

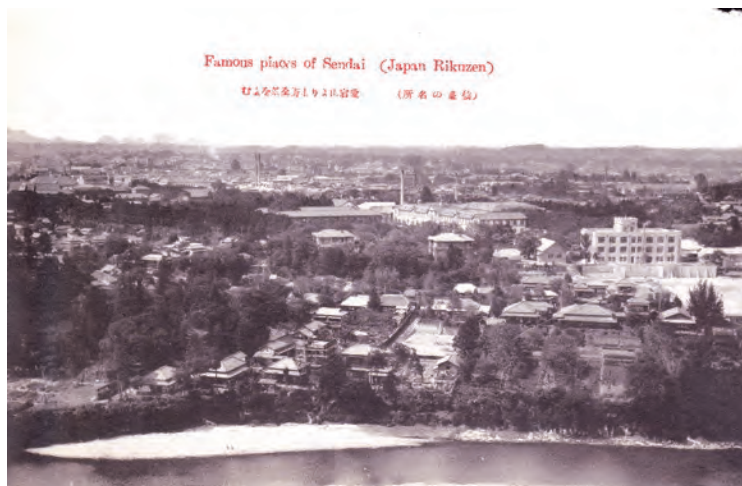
津波の泥に埋もれ、いわば“再発掘”された土器。縄文時代における牡鹿半島の拠点集落のあった現在の給分浜で出土。

Fragments of Jomon pottery

#### 5. 石皿プレート

硬質な玄昌石の採掘技術、平板に加工するスレート製作技術、硯の仕上げ技術を応用した、海外向け製品。震災後の新たな販路開拓の試み。

Plate



#### 6. 絵葉書「仙台の名所」

昭和初期の撮影か。東北学院大学本館(大正15年竣工)の左側にふたつの洋館が確認できる。うち左側が現在のデフォレスト館。

Postcard “The sights of Sendai”

■ 2015 年度春季特別展・大学博物館共同企画 V

「東日本大震災と文化遺産 ー被災と復旧、そして文化創造へ」出品目録一覧

大学博物館紹介				
番号	資料名	英訳名	制作地/年代等	数量
1	墨書人面土器	Face-marked pottery	多賀城市市川橋遺跡出土	1
2	おしらさま	<i>Oshirasama</i> [God]		2
第一章 ミュージアムの復興に向けて				
3	金華山祈禱札	Amulet		6
4	陸前国金華山眞景明細図	Landscape of Mt. Kinka		1
5	捕鯨鉞（脱塩処理済）	Harpoon		1
6	クジラの耳骨	Whale ear bone		1
7	クジラのヒゲ	Whale fin		2
8	火熨斗（脱塩処理済）	<i>Hinoshi</i> [Iron]		1
9	アイロン（脱塩処理済）	Iron		1
10	滑車（脱塩処理済）	Pulley		1
11	マンボウ突き鉞（脱塩処理済）	Harpoon		1
12	糸枠（脱塩未処理）	Reel		10
13	イシャリ（脱塩未処理）	<i>Ishari</i> [Fishing gear]		2
14	文化財レスキューカルテ	Treatment record of disaster-stricken materials		1
15	文化財レスキュー資料台帳	Data sheet of disaster-stricken materials		1
16	クリーニング用具	Cleaning tools		
17	縄文土器片（後山貝塚出土）	Fragment of Jomon pottery		
18	一字一石経（後山観音堂出土）	Small stone scripture		
第二章 伝統工芸の復興に向けて				
19	雄勝硯	Ogatsu inkstone		
20	石皿プレート	Plate		1
21	玄昌石之記	<i>Gensho-seki no ki</i> [The history of <i>Gensho-seki</i> ]		1
22	写真「女川村スレート石」	Picture of Onagawa-mura		1
第三章 近代建築の価値再発見に向けて				
23	絵葉書「仙台の名所」二枚一對	Postcard "The sights of Sendai"		2
24	絵葉書「仙台の名所」	Postcard "The sights of Sendai"		1
25	最新版仙台市全図 市街町村及番地入	Map of the city of Sendai		1
26	デフォレスト館模型	Miniature of Deforest building		1



# Wexus

2015年度 春季特別展

絆  
・  
連携

大学博物館共同企画 V



## 西南学院大学博物館

キリスト教の源流と東方伝播ー受容と禁教、そして解禁



## 開催概要

本展覧会は、西南学院大学博物館が所蔵する資料から、キリスト教の源流をたどるとともに、非西欧圏へ広がりを見せたなかでどのように受け入れられていったのかについて紹介するものである。キリスト教の起源はユダヤ教にある。ユダヤ教では祭具が美術工芸品(JUDAICA)としてつくられており、これらは祭具としての役割を果たすとともに、教義から派生した芸術性も示されている。キリスト教が各地に広まるなかで、受容された地域には聖画像(イコン)がつくられている。これらからキリスト教に直面したアジア圏の人たちが、どのように理解していたのかを知ることができる。

日本にもキリスト教が受け入れられるが、17世紀から19世紀にかけて、そのほとんどは禁教下にあった。こうしたなかで、一度根付いたキリスト教の信仰がどのように保持されていたのか。あわせて、禁教下の日本でどのような社会状況だったのかについて迫る。鎖国から開国へと日本が国際社会に組みこまれていくことになるが、そのなかでキリスト教解禁へと舵が切られる。これにより、日本国内でどのような状況に変化したのか取り上げていく。

このように、キリスト教の母胎であるユダヤ教に始まり、キリスト教が世界に広まりをみせるなかでどのように受容されたのか、その実体に迫るものである。



# I

## キリスト教の起源 —ユダヤ—

The Origin of Christianity —Judaism—

ユダヤ教はキリスト教の母体となった宗教である。ユダヤには聖典にもとづいたさまざまな規定や儀式があり、それらはユダヤのひとびとの生活の基本となっている。彼らの生活のなかで使用される様々な祭具には、宗教的装飾がほどこされており、しばしば美しく豪華に飾られた。ユダヤの祭具はジュダイカと呼ばれ、ユダヤの美術工芸品とされている。ジュダイカをとおして、古代から現代まで受け継がれるユダヤの生活や多様なユダヤの歴史に迫ることができる。

The Judaism is the religion related to the origin of Christianity. That has various rules and ceremonies based on Jewish sacred books. Jews obey them in daily life. Various ritual artifacts used in their life were often decorated gorgeously with motifs based on Jewish doctrines. Ritual artifacts of Judaism are called "JUDAICA", jewish arts and crafts. Through JUDAICA, we can learn Jewish life and a variety of Jewish history inherited from the ancient times to the present.



## 1. 浅底平皿型ランプ

B.C.1200 ~ B.C.930

最初期の古代のランプは、平たい皿の形をしており、芯をそのふちのひとつに挟むようになっている。油はイスラエルではもっぱらオリーブ油が使用された。古代ランプは家庭で日用品として使用されるほか、死者の明かりを照らすという儀式的用途ももっていた。(内島)

Shallow flat plate oil type lamp



## 2. 装飾付ユダヤ・ランプ

2世紀~4世紀

芯口が7個あり、中央には油の注ぎ口がある。注ぎ口を中心に、ユダヤ教でよく見られる植物文様の装飾がなされている。(内島)

Jewish lamp with ornament



### 3. 魚尾型把手付平型ユダヤ・ランプ

3世紀～5世紀

中央の油の注ぎ口を囲むかたちで芯口が7つあり、魚の尾のような持ち手が特徴的である。芯口の配置とその口の数は、ユダヤの最も重要な祭具であるメノラーをモチーフとしていると思われる。(内島)

Jewish lamp with fish type handle



### 4. メノラー

インド

ユダヤ教で使用される祭具メノラーはヘブライ語で「燭台」を意味し、主に7枝の形をとるものである。その形は生命の木を象徴するといわれている。古代の床モザイクから、現代の祭具にいたるまでの装飾モチーフとして使用され、現在のイスラエル国の紋章でもある。(内島)

Menorah





## 5. トーラーとトーラー・マントル

19世紀

トーラーはユダヤ教の聖典であり、キリスト教では旧約聖書の『モーセ五書』にあたる。トーラーの巻物を包むマントルに刺繍された六角形の星は、16世紀頃からユダヤの象徴として使われ始め、現在のイスラエルの国旗に使用されている。地域によっては、トーラーの巻物を木製や金属製のケースに入れるところもある。(内島)

Torah and Torah mantle





①

## 6. ヤド

①エルサレム

トーラーを朗読するときに、朗読箇所を示すための指示棒である。朗読時以外にはトーラーの巻棒(エーツ・ハイム)の上端から吊り下げられ、装飾のひとつとなる。その形は人差し指を伸ばした握りこぶしで示される。(内島)

Yad (Torah pointer)

## 7. ホーシェン(胸当て)

トーラーの巻物に取り付けられる飾り板。神の啓示により大祭司が「胸当て」を付けるよう義務付けられたことに由来する(『出エジプト』28:13-30、39:8-21)。本資料には十戒とその番人である2頭の獅子が彫刻されている。胸当ての下方に設けられた小さな長方形のスペースは、トーラー巻物で使用される祝日の名称を刻んだ薄板をさし挟むためのものである。胸当ての形状は地域によって異なり、三角形のものや背面に鏡を備えたものがある。(内島)

Tas (Torah Shield)



## 8. ハヌキヤ・ランプ

19世紀 / エルサレム

ユダヤの祝祭のひとつハヌカ(神殿奉献祭)で用いられる9枝の燭台。紀元前2世紀におこったユダヤ人の反乱(マカバイ戦争)において、燭台の灯火が8日間続いたという奇跡を記念して、8枝と点火用の受け皿とあわせて通常9枝からなっている。ハヌキヤ・ランプは、ユダヤの祭具のなかでも凝ったものが多く、そのデザインは多様化している。本資料では、ユダヤの祭具によく用いられる装飾モチーフである。十戒の石版とその番人である獅子が表されている。(内島)

Hanukkah lamp



## 9. シャバット・ランプ

19世紀 / ツファット(ガリラヤ)

安息日が始まる前、金曜日の夕方に家庭で灯すランプである。安息日に入ると、火をつけることを含めて労働が禁じられる。本資料はブロンズ製で、中央にはヘブライ語で安息日を意味するシャバットの文字が表されている。その文字の上部と下部には12個の装飾があり、イスラエル12部族のエンブレムだと推測される。(内島)

Shabbath lamp



## II

### キリスト教の広まり

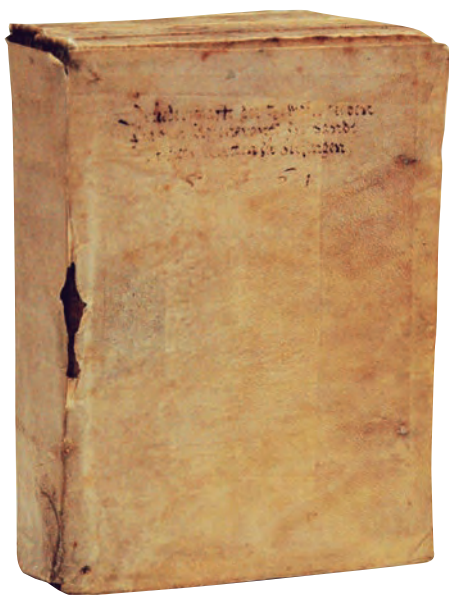
#### The Spread of Christianity

キリスト教は、現在、様々な地域で信仰されている。当初は西欧や東欧を中心として広まり、早くからアフリカ大陸にも伝わっていた。15世紀に始まる大航海時代を経ると、西欧諸国による植民地支配の対象となった南米やアジアにも布教が開始され、キリスト教は世界中で信仰者を獲得することになる。ここでは、様々な地域で制作された祈念画、祈祷書などを紹介する。

Christianity is currently believed in various areas. At first, it was believed around Western and Eastern Europe. Then, it spread in the African Continent. Since the age of Discovery which began in the 15th century, Christianity was propagated in South America and Asia, and it obtained the believer all over the world. In this section, we will present devotional images and a prayer book produced in various areas.







## 10. ロザリオ祈祷書

1556年 / イタリア

ロザリオ祈祷書は、ロザリオ(数珠)を繰り返しながら祈りを唱え、聖母マリアやイエスの生涯を瞑想する信心業のための手引書である。ロザリオの信心の普及を背景に、一般信徒の私的な礼拝のために執筆された。祈祷書には、瞑想の助けとして聖母マリアやイエスの物語が挿絵として描かれている。本資料は、イタリア語で書かれた最古のロザリオ祈祷書であり、1521年に発表された後、16世紀だけでも15刷を重ねた。作者は、信心の隆盛において中心的な役割を担ったドメニコ会に属す修道士アルベルト・ダ・カステッロである。(内島)

Rosary prayer book



## 11. 磔刑

19世紀 / エチオピア

聖書、もしくは祈祷書の挿絵。磔刑に処せられたイエスを中央に、その右には聖母マリア、左には福音書家ヨハネが描かれている。キリスト教美術において最も重要な主題であり、教会や家庭の祭壇画などにも頻繁に描かれた。本資料はエチオピアのものであり、同地には4世紀にキリスト教が伝えられている。(内島)

Crucifixion





## 12. 受胎告知と諸聖人

19～20世紀 / ルーマニア

ルーマニア正教のガラス・イコン。中央に描かれた「受胎告知」を挟むように、左右には4名の正教会の祭司たちが描かれている。上段には左から、聖母マリア・「三位一体と聖母」・洗礼者ヨハネが描かれ、下段には左から聖ゲオルギウス・「聖十字架とコンスタンティヌス帝とその母ヘレナ」・聖ディミトリオスが描かれている。キリスト教を守護する戦士とされる聖ゲオルギウスと聖ディミトリオスの選択は、オスマン・トルコという異教徒の驚異にさらされた歴史的背景によると指摘される。(内島)

Annunciation and Saints



### 13. フランシスコ・ザビエル像

18世紀 / インド

イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルは1549年に鹿児島に上陸し、日本にキリスト教を伝えた。その前にすでにインドで伝道を開始している。1533年にインドにゴア司教区が設立されると、42年にはザビエルが到着した。インドでの活動はまさに日本での伝道の布石となっていた。本資料は頭頂部に穴が開いていることから頭光(ニンプス)を表す部材があったものと思われる。これはザビエルが聖人であることを示すものである。本資料はインドで制作されたもので、同地でザビエルは篤く信仰されている。(内島)

Statue of St. Francisco Xavier

### 14. 景教僧文青磁壺

13世紀 / 中国

中国浙江省の越州窯で元代につくられたものである。壺の四面に聖職者像が貼り付けられており、その特徴から西域人と思われる。修道衣の腰紐などはフランシスコ会の僧服に類似している。中国にはネストリウス派キリスト教が635年に伝えられており、景教と呼ばれた。845年に仏教禁圧に連動して衰退し、これ以降、再興を繰り返した。この再興期が13世紀のフランシスコ会士たちの布教期に相当し、本資料はこの頃につくられたものと位置付けられる。(内島)

Porcelain of *Keikyo* priest







## 15. 聖パスカリス奉納画

1927年 / メキシコ

聖餐式の守護聖人である聖パスカリス(1540-1592年)を描いた奉納画。パスカリスは聖霊降臨祭(聖霊のバスカ「復活」)の日曜日にスペインの小村で生をうけ、名はそのことに由来している。フランシスコ会に所属し、聖体顕示台の前で熱心な祈りを捧げたといわれている。1690年に聖人として列聖された。また、貧者の空腹を満たすという奇跡をおこしたことから、料理と台所の守護聖人ともされる。本資料では、竈の上方で修道服にエプロンの姿で表されている。彼のシンボルでもある聖体顕示台も描きこまれている。スペインによる植民地支配の背景から、メキシコなどの南米にキリスト教が伝わり、スペインの聖人も広く崇敬された。(内島)

Prayer image of St. Paschal



## 16. 農民聖イシドロと寄進者

19世紀 / フィリピン

農民とマドリッドの守護聖人である聖イシドロ(1070頃-1130年)を描いた礼拝画。イシドロは敬虔な信徒であったため、朝の礼拝をしている間に天使が彼に代わって牛に鋤を引かせて畑仕事を何倍もの速さで進めてくれたという奇跡の物語がある。本資料では手を合わせる寄進者とともに、その奇跡の物語が背景に表されている。(内島)

St. Isidoro and a donor



## 17. 聖三位一体

19世紀 / フィリピン

三位一体とはキリスト教神学の根幹をなす教義である。父なる神と子なるイエス・キリストと聖霊が皆等しく尊く、それら3つの位格(ペルソナ)が1つの実体・本質として完全に一致・交流することを意味する。17世紀、スペインの支配下にあったフィリピンやラテンアメリカで見られる「三位一体」の図像では、本作品のように同一の姿の3人の男性像で表されることが多く、中央に父なる神、左右に子なるイエスと聖霊が表される。ここでは、神が支配する全世界を意味する球体の上に、向かって左からイエス、神、聖霊が並んでいる。同一の赤い布をまとい、右手で祝福のポーズを示す3者において、イエスは手足に描かれた磔刑を表す釘跡の傷と彼の象徴である犠牲の子羊によって、神は顔の描かれた太陽と左手に握る杓杖によって、聖霊はその象徴である白い鳩によって見分けられる。(内島)

Trinity

## 18. 無原罪懐胎の聖母マリア像

18世紀 / フィリピン

聖母マリアの聖性をめぐる教義のひとつが「無原罪懐胎」である。マリアは原罪なくして母アンナの胎内に宿ったとする考えで、長い間論争されていた。カトリックの協議では1854年に正式な教義として認められている。フィリピンの宗主国スペインではバロック期に好まれた主題であり、本資料は雲に浮かぶ天使たちに支えられて三日月の上になつ姿で表現されている。(内島)

Statue of the Immaculate Conception





# III

## 日本キリスト教史 — 光と影 —

Japanese history of Christianity - The Bright and the Dark side

1549年、イエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルがインドのゴアを経由し、鹿児島に上陸する。これが日本とキリスト教の出会いである。以降、各地に南蛮船が来航するとともに、各地でキリスト教が受容され、南蛮文化が花開いた。しかし、1637年に島原・天草一揆が勃発、翌年に鎮圧されると、日本は禁教の世となる。公にキリスト教を信仰することが許されなくなると、キリシタンたちは創意工夫して祈りを捧げていた。また、主な交易相手がポルトガルからオランダへ変わったことにより、南蛮文化にかわり紅毛文化が芽生え、日本に新たな時代が訪れたのであった。

In 1549 St. Francisco Xavier, missionary of the Society of Jesus, arrived at Kagoshima via Gore in India. This is the encounter of Japan and Christianity. While European ships visited each place of Japan, Christianity was received in many places. And *Namban* culture was established. However, the Christian faith was prohibited in Japan because of Shimabara-Amakusa rebellion in 1637. As it was not allowed to have Christian faith publicly, Christians in Japan secretly tried to pray. In addition, *Komo* culture arose in stead of Nanban culture because the Netherlands took the place of Portugal as a main Japanese trade partner. The new era began in Japan.







## 19. 南蛮船絵馬

19世紀

鎖国体制確立以前、南蛮船が日本に多くの文物をもたらした。ポルトガル船はマカオを、スペインはマニラを拠点に貿易を展開していた。1624(寛永元)年にスペイン船、1639(寛永16)年にポルトガル船の日本来航を禁じられるにともない、オランダが日本との貿易権を独占する。しかし、南蛮船がもたらしていた華やかな時代は、後世にも伝えられるところとなり、本資料のような南蛮船を描いた絵馬が社寺に奉納されている。南蛮人行列絵馬と同様に、蓄財を祈念したものになるだろうが、当時のきらびやかな時代は忘れられることなく、聞き伝えられていたことを示す。なお本図は、宮内庁三の丸尚蔵館が所蔵する南蛮屏風の左隻部分をモチーフにしている。(安高)

Votive picture of Westerner's ship



## 20. 南蛮人行列絵馬

19世紀

ポルトガル人・スペイン人などを南蛮人というが、鎖国体制確立前、彼らがもたらした西洋の新しい文物は、南蛮文化として昇華し、一世を風靡した。彼らが上陸して行列をなす姿は多くの関心を集め、狩野派をはじめとする絵師によりリアルに描かれている。当時、南蛮人は財をもたらす存在として認識され、南蛮貿易が途絶えてもなお、語り継がれた。この南蛮人行列絵馬も社寺に奉納されているが、蓄財を祈念したものであろう。なお、原図は現在、南蛮文化館が所蔵している南蛮屏風の右隻部分を参考に描かれている。(安高)

Votive picture of Westerner's parade



## 21. マリア観音像

17世紀

江戸幕府の禁教政策下において、潜伏キリシタンたちは慈母観音をマリアと同一視して信仰の対象としていた。擬似信仰のひとつであるが、それだけ江戸幕府がキリスト教を厳しく取り締まっていたことを示している。本資料は中国徳化窯で焼かれた白磁で、浦上村の潜伏キリシタンが所持していたものである。浦上三番崩れや四番崩れで浦上村のキリシタンたちが検挙された際、長崎奉行所に信仰物を悉く没収されて保管されていたが、明治に入ると教部省にひき渡されている。しかし、本資料はこれを免れたものであり、長く浦上村のキリシタンが所持していた。なお、東京国立博物館には上記の経緯後、潜伏キリシタンの資料が移管されており、このなかには本資料の同類型も含んでいる。(安高)

Statue of Mary Kannon



浮かびあがるキリスト磔刑



## 22. キリシタン魔鏡

19世紀

魔鏡とはmagic mirrorのことであり、一見すると普通の銅鏡であるが、光を照射すると図像が浮かび上がるものである。形状は鏡の表面に凹凸をつけたりするものや、裏面にその図像を鑄込んだものを嵌め合わせたものなどがあるが、本資料は後者にあたる。中国では紀元前2世紀頃から2世紀にかけて透光鏡と呼ばれるものが造られていた。本資料に光を照射すると中央に磔刑のキリスト、そしてこれを拝む聖母マリアがあらわれる。(安高)

Magic mirror



## 23. 天草四郎

1874(明治7)年

島原・天草一揆の首領の益田四郎時貞は、小西行長の旧臣で浪人の益田甚兵衛好次を父にもつ。いつキリシタンになったのかについては不明であるものの、洗礼名はジェロニモとされる。資料によれば四郎は、美形であり才気煥発、医術を心得えており、武術にも長けている。様々な奇蹟をおこない、教義にも精通した人物として紹介されている。本資料は明治時代に作製された天草四郎の版画であるが、甲冑を身に付けた勇猛な姿で描かれている。天草四郎に関するこうした版画がつくられていることは、禁教解禁を象徴するものともいえよう。(安高)

Ukiyo-e of Amakusa Shiro



## 24. キリシタン制札

1682(天和2)年

江戸幕府は厳しい禁教政策を断行するなかで、住民による相互監視も同時におこなっていた。五人組制もそのひとつであるが、広く周知させるのに効果的だったのがキリシタンの訴人制札である。伴天連の訴人は銀500枚、イルマンの訴人は銀300枚、立婦者の訴人は300枚、同宿・宗門の訴人は100枚を与えるとされたが、この褒賞額は時期によって変化している。訴人褒賞制は1626(寛永3)年にはじまったもので、長崎市中には囑託銀を掲げて訴人を促していた。(安高)

Proclamation banning Christianity





## 25. 宗門改影踏絵帳

1816(文化13)年

本資料は嶋原藩武家の宗門人別改帳である。嶋原藩は長崎奉行所から踏絵を借用して絵踏していた藩のひとつで、絵踏のことを「影踏」と称していたことが本資料名に由来する。嶋原藩では人別改を絵踏と一緒にっており、「宗門人別改帳」に記載されることによって、住民がキリシタンではないという証明となった。檀那寺と檀家が押印するが、地域によっては爪印が押されている。本資料をみると、戸主以外の妻・男子・女子には筆軸印が押されていることがわかる。(安高)

Documents with names of apostates



## 26. 南京国寧波湊明船之図

江戸時代後期

江戸時代、日本に来航していた中国船を描いたもの。南京の寧波(現在の浙江省)港から出航してきた貿易船である。船の全長36間(約65.4m)、幅16間(約29.09m)、帆柱12丈(36.36m)のジャンク船は、総乗組員は116名まで可能だった。木造帆船は大型のものになると、2,000tで200名乗りというものまで造られるようになった。(安高)

Picture of Chinese ship



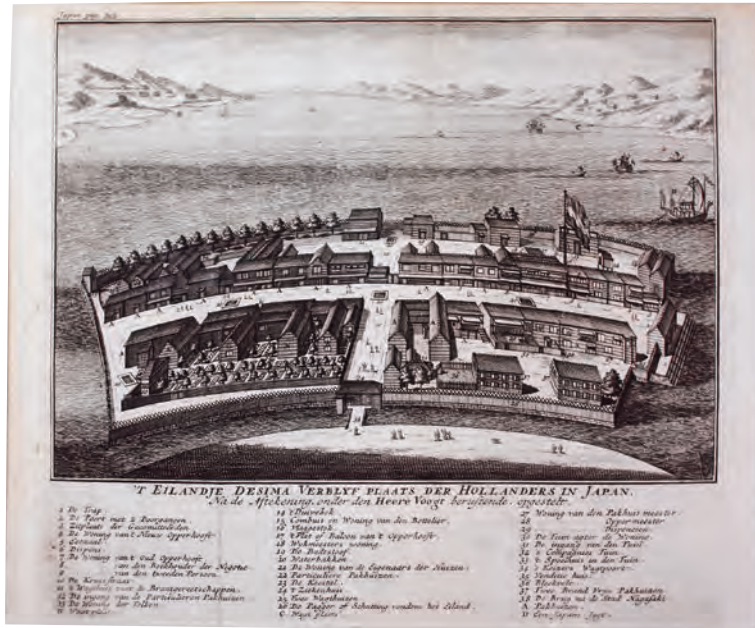
## 27. 唐蘭船長崎入津図

19世紀

鶴の港と称される長崎港に停泊するオランダ船と唐船、さらには、曳航中の唐船が描かれている。当時、外国船が長崎に来航したときは、長崎奉行所が検使船を派遣し、旗合わせなどで貿易船かの確認がおこなわれ、その後、小船で曳航されて入港する。まさに中央に描かれている唐船はその様子をとらえている。なお、作者は浮世絵師として知られる歌川貞秀で、遠近法を駆使した俯瞰的な風景で描かれている。(安高)

Picture of foreign ships entering Nagasaki port





## 28. 出島図

1735年頃

出島は禁教政策を象徴するものであり、元来、ポルトガル人を収容するために1636(寛永13)年、中島川下流に出島商人25名が出資してつくられた。1641(寛永18)年、ポルトガル人追放後に空き地となっていた出島に平戸オランダ商館が移転され、オランダ人は出島での滞留を条件に貿易を許され、制限された空間のなかで生活した。出島を外出できる日や出入りできる日本人も限られており、当時のオランダ人たちは出島のことを“監獄”とも表現している。本資料はティリオンが刊行した地図で、1735(享保20)年頃の出島を描いたものである。(安高)

Map of Dejima



## 29. 紅毛人プラケット

18～19世紀

西洋の小型壁掛けを「プラケット」というが、蒔絵技術による描写は18世紀後半に西洋で流行し、出島オランダ商館を通じて日本にもたらされた。本資料は舐をひいたオランダ人をモチーフとしたもので、裏面には長崎八景のひとつ「神崎帰帆」が描かれている。西洋の技術が日本人職人の手によって国産化されたもので、長崎土産のひとつとして作製されていた。日本は鎖国(海禁)体制・禁教政策がとられたものの、西洋の文化・文物・技術などを積極的に受容していたことがわかる。(安高)

Small wall hanging with Picture of a Dutch trader

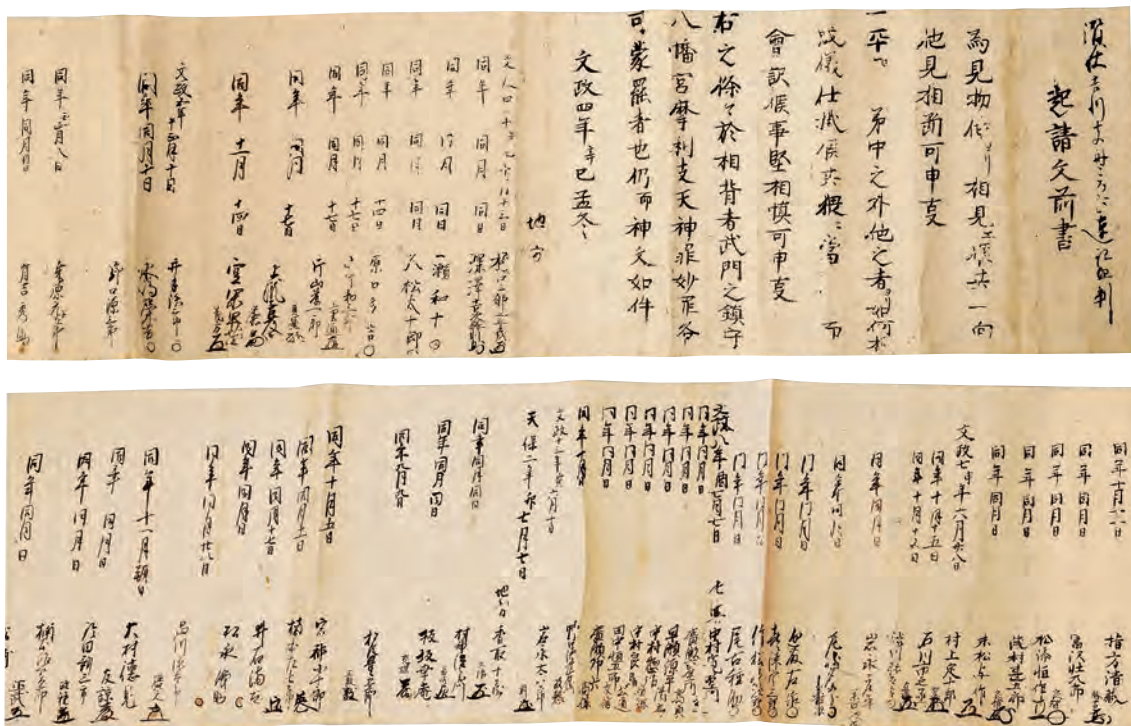
### 30. 紅毛人硯屏

19世紀

鎖国体制の確立にともない、オランダ人が長崎で居住するようになると、国内は南蛮文化から紅毛文化へと変容する。そこで美術工芸品のモチーフもオランダ人へとシフトするようになり、本資料のような作風も生まれた。周囲には螺鈿細工がほどこされているなど、控えめながらも日本人職人の技術の高さが垣間見られる。また、本資料はそもそも硯屏として作られたわけではなく、あとから仕立てられたものと思われるが、日本調度品にこうしたモチーフが取り入れられるなど、当時の異国趣味もうかがい知れる。(安高)



Inkstone screen with Picture of a Dutch trader



### 31. 潜伏キリシタンころび証文

1850(嘉永3)年

本資料は起請文前書に始まる1821(文政4)年から1850(嘉永3)年までの大村藩武士だけを記した149名の血判起請文である。大村はかつてキリシタン大名大村純忠の城下町であり、領内には多数のキリシタンたちがいた地域である。1657(明暦3)年の「郡崩れ」では700名ともいわれる殉教者が出ている。そのためか、江戸時代後期に改めて武士に対する起請文を提出させており、宗門元締と年番頭が最後に連署している。大村藩が公的におこなった起請文であり、血判付という強固な誓詞であったことがわかる。(安高)

Document with blood seal



# IV

## 禁教解禁に向かって

To Remove the Prohibition of Christianity

日本では対外列強の圧力により、禁教政策を維持することが困難となってくる。1858年に日米修好通商条約を締結すると、キリシタン政策の転換を迫られた。キリスト教信仰が許されたのは、1874年のキリシタン制札を撤去されてからだった。その後、外国人宣教師らが訪れ、200年以上もの時を経て布教が再開されていくことになる。

It becomes difficult in Japan to maintain the prohibition against Christianity under pressure of the foreign Great Powers. In 1858, when the Treaty of Amity and Commerce (the United States of America-Japan) was concluded, Japan was demanded to change the policy of prohibition against Christianity. Finally, Christianity was permitted in Japan when the proclamation banning Christianity was removed in 1878. After more than 200 years since first banning Christianity, foreign missionary came to Japan again and restarts propagation.





### 32. 阿蘭陀国使節長崎入船黒田鍋島陣営図

1844(天保15)年、オランダ軍艦レバノン号が長崎にオランダ国王ウィレム二世の国書と肖像画を持参して来航する。使節コープスは、長崎奉行伊沢政義らと謁見し、国書を手渡し、開国勧告をおこなう。この翌年、老中阿部正弘により開国は拒否されることになるが、幕府の祖法である「鎖国」が限界に近かったことを象徴する出来事だった。本資料はレバノン号が入港しているときの様子を描いたもので、長崎警備を担当する黒田藩と鍋島藩の配備もとらえている。中央にレバノン号を配し、戸町番所や魚見岳、スズレ台場、神崎台場などもみえる。(安高)

Picture of Dutch ships entering Nagasaki port





### 33. プチャーチン会談の図

19世紀

ロシア艦隊司令長官で遣日使節のプチャーチンは、1853(嘉永6)年、長崎へ軍艦ディアナ号に搭乗して来航して開国通商や国境画定の国書を渡す。そして同年12月に再来航し、長崎奉行所西役所で日本全権筒井政憲・川路聖謨らと審議する。その後、日露和親条約(長楽寺)で締結、さらに追加条約(長崎)、日露修好通商条約(江戸)を締結した。本資料は長崎奉行所で筒井政憲らとの審議の様子を描いたものであり、「於御書院御返箱御渡之図」「於御書院拝領物御渡之図」である。画者の緒方探香は福岡藩で代々御用絵師をつとめた緒方家の九代目当主である。「黒田二十四騎図」(福岡市博物館蔵)の画者としても知られる。(安高)

Illustration of negotiations with Admiral Putyatin

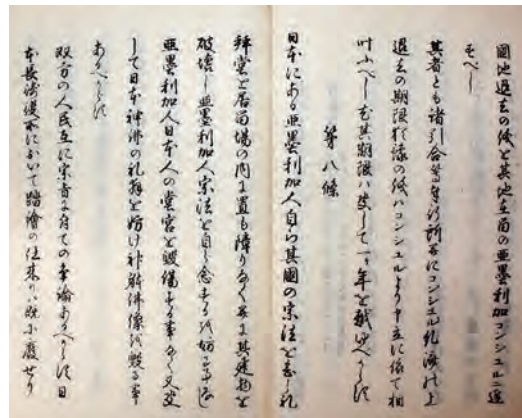


### 34. 米利幹事略

19世紀

1853(嘉永6)年、マシュー・ペリー率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀に来航する。ここでフィルモア大統領の親書を手渡し、再来航を通達して、一端、香港に戻った。翌年、ペリー艦隊は当初予測されていた浦賀沖ではなく、小柴村に軍艦7隻を率いてあらわれて停泊しているが、この時の様子を描いており、その後の浦賀での交渉場面も記している。バッテイラに乗って測量している様子やアメリカ国旗も描かれている。なお、「浦賀日記」として代官江川太郎左衛門からの報告書も収められ当時の緊迫した国内事情を知ることができる。(安高)

Records written concerning events with America



### 35. 安政五ヶ国条約(写)

20世紀

1858(安政5)年、日本はアメリカ・イギリス・フランス・ロシア・オランダと修好通商条約を締結する。これを安政五ヶ国条約と総称するが、その内容は日本にとって不平等なものだった。アメリカと最初に締結するが、その内容は片務的最恵国待遇のもと領事の駐在や函館・神奈川(横浜)・長崎・兵庫(神戸)を開港し、江戸と大坂を開市とすること。そして、自由貿易と関税自主権の喪失、領事裁判権のない治外法権、そして外国人遊歩規定だった。ここでは日本の宗教政策についても言及されており、長崎での「踏絵」廃止が規定されている。また、オランダとは居留地内での礼拝堂建立を認めるなど、修好通商条約の締結によって、宗教政策も見直す段階に入ってきたのであった。(安高)

The Unites States-Japan Treaty of Amity and Commerce (copy)



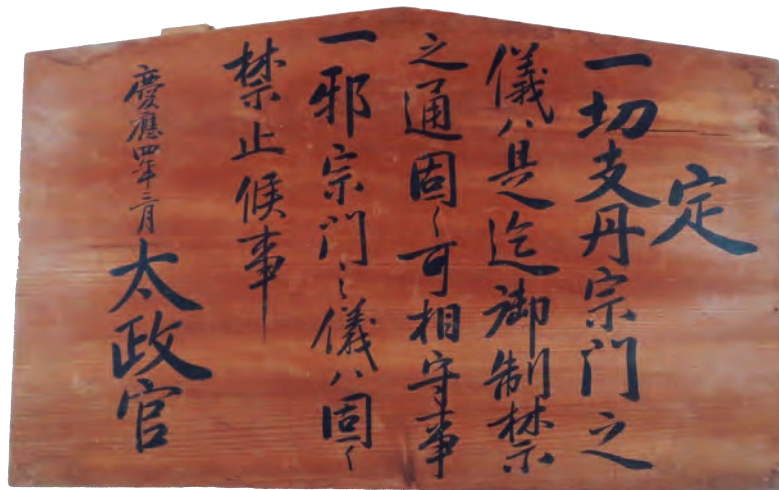


### 36. 蛮艦泊碇港之図

19世紀

安政期になると、長崎港には異国船の来航が相次ぐことになる。1855(安政2)年3月には、フランス軍艦やイギリス軍艦、さらに同年8月にはオランダ蒸気船など、開国交渉のために長崎を訪れ、結果として安政五ヶ国条約が締結される。本資料は、長崎絵(長崎版画)と呼ばれるもので、当時の長崎港は、異国風情にあふれるところであり、これを素材とした作品がお土産品として販売された。本資料はイギリス軍艦が長崎に停泊している様子を描いたもので、イングランド国旗などが掲げられている。(安高)

Picture of foreign ships in Nagasaki anchorage

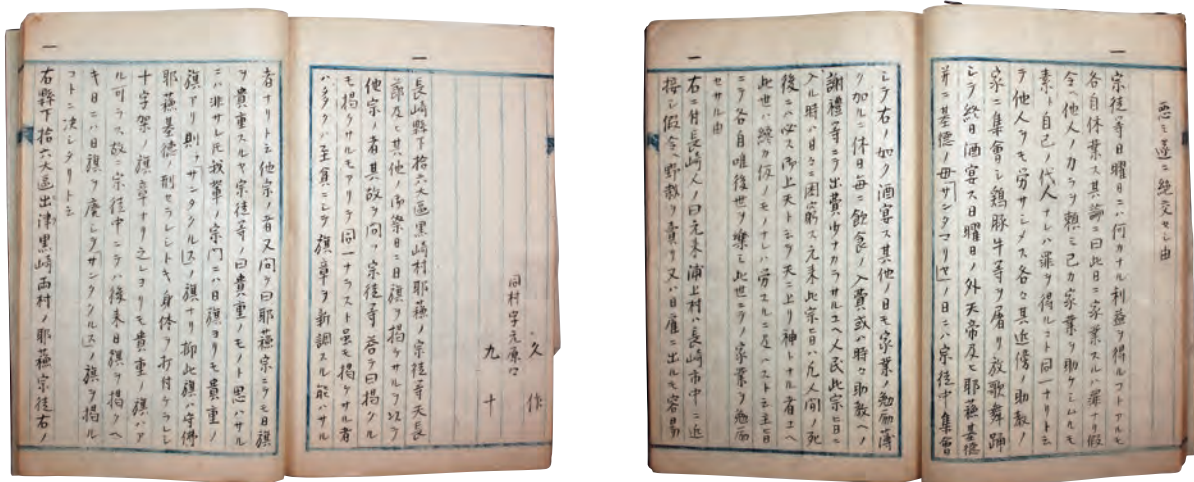


### 37. キリシタン制札

1868(慶応4)年  
芦沼完治氏(長野県)・芦沼康久氏(東京都)旧蔵

安政五カ国条約が締結されてからも、日本国内では禁教政策は維持されていた。本資料はキリシタン禁制を掲げた太政官札で五榜の掲示のひとつである。対外的な圧力によって絵踏の廃止や礼拝堂の建立が認めざるをえなかったものの、日本人に対しては引き続き禁教という国是は掲げられたままとっていた。これが許されるようになったのが1873(明治6)年にキリシタン制札が撤去されてからだ。 (安高)

Proclamation banning Christianity



### 38. 耶蘇宗徒群居搜索書

1875(明治8)年

本資料は桜井虎太郎が長崎県下の耶蘇宗徒について取り調べたものである。1867(慶応3)年の浦上四番崩れを受けて、浦上村のキリシタンたちは萩・津和野などの各地に預けられる。ここで厳しい教誨が行われ、時には拷問も行われた。その後、帰村が許されたが、そのときの状況などを書き記している。潜伏時のキリシタンたちの生活状況をはじめ、長崎市中および浦上村の地理的なことまでつづさに書かれている。なかには四番崩れの時に脱走して大坂天主堂に潜伏していた人名なども記録しているなど、浦上四番崩れの状況と帰村後の様子などを本資料により知ることができる。 (安高)

Documents related to search operations on christian houses



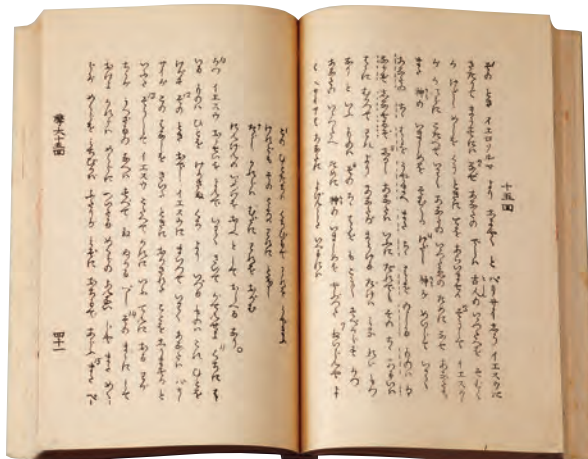


### 39. ベッテルハイム訳聖書馬太伝福音書

1855年頃

安政の開国にともない、多くの宣教師たちが日本を訪れるようになり、日本伝道の再開を予見させるようになる。しかし、日本国内では依然としてキリスト教信仰は禁じられており、市中にはキリシタン制札も掲げられていた。ハンガリー人の医師ベッテルハイムはイギリス人女性と結婚して英国籍となり、宣教師を志して1845年に琉球に派遣される。琉球も禁教下にあったが、ここで、四福音書(『路加(ロカ)伝福音書』、『約翰(ヨハネ)伝福音書』、『聖差言行伝』(使徒行伝)、『保羅羅羅馬人書(パウロ ロマびとによするのしよ)』)の全てを琉球語訳した。マタイ福音書は未刊行のままで、1976年にその稿本が発見された。(安高)

Gospel of Matthew, J. B. Bettelheim version



### 40. ゴーブル訳聖書摩太福音書

1871年

バプテスト派の宣教師J・ゴーブルは、1860年(万延元年)にペリー艦隊の水兵として来日して宣教活動をおこなうようになる。貧しかったゴーブルは十分な神学教育を受けていないにもかかわらず、ギリシャ語の原語と欽定訳聖書からの木版平仮名の「摩太福音書」を翻訳した。1864年(元治元年)から始めて、1871年(明治4年)に『摩太福音書』を東京で出版する。これが国内で最初に刊行された和訳聖書である。(安高)

Gospel of Matthew, J. Goble version

■ 2015 年度春季特別展・大学博物館共同企画 V

「キリスト教の源流と東方伝播－受容と禁教、そして解禁」出品目録一覧

I. キリスト教の起源－ユダヤ				
	資料名	英訳名	制作地/年代	数量
1	浅底平皿型ランプ	Shallow flat plate oil type lamp	B.C.1200 ~ B.C.930	1
2	装飾付ユダヤ・ランプ	Jewish lamp with ornament	2 世紀～ 4 世紀	1
3	魚尾型把手付 平型ユダヤ・ランプ	Jewish lamp with fish type handle	3 世紀～ 5 世紀	1
4	メノラー	Menorah	インド	1
5	トーラーとトーラー・マントル	Torah and Torah mantle	19世紀	1
6	ヤド	Yad (Torah pointer)		2
7	ホーシェン (胸当て)	Tas (Torah Shield)		1
8	ハヌキヤ・ランプ	Hanukkah lamp	エルサレム /19 世紀	1
9	シャバット・ランプ	Shabbath lamp	ツファット (ガリラヤ) /19 世紀	1
II. キリスト教の広まり				
10	ロザリオ祈祷書	Rosary prayer book	イタリア /1556 年	1
11	磔刑	Crucifixion	エチオピア /19 世紀	1
12	受胎告知と諸聖人	Annunciation and Saints	ルーマニア /19 ~ 20 世紀	1
13	フランシスコ・ザビエル像	Statue of St. Francisco Xavier	インド /18 世紀	1
14	景教僧文青磁壺	Porcelain of Keikyo priest	中国 /13 世紀	1
15	聖パスカリス奉納画	Prayer image of St. Paschal	メキシコ /1927 年	1
16	農民聖イシドロと寄進者	St. Isidoro and a donor	フィリピン /19 世紀	1
17	聖三位一体	Trinity	フィリピン /19 世紀	1
18	無原罪懐胎の聖母マリア像	Statue of the Immaculate Conception	フィリピン /18 世紀	1
III. 日本キリスト教史－光と影				
19	南蛮船絵馬	Votive picture of Westerner's ship	19 世紀	1
20	南蛮人行列絵馬	Votive picture of Westerner's parade	19 世紀	1
21	マリア観音像	Statue of Mary Kannon	17世紀	1
22	キリシタン魔鏡	Magic mirror	19 世紀	1
23	天草四郎	Ukiyo-e of Amakusa Shiro	1874 (明治 7) 年	1
24	キリシタン制札	Proclamation banning Christianity	1682 (天和 2) 年	1
25	宗門改影踏絵帳	Documents with names of apostates	1816 (文化 13) 年	1
26	南京国寧波湊明船之図	Picture of Chinese ship	江戸時代後期	1
27	唐蘭船長崎入津図	Picture of foreign ships entering Nagasaki port	19 世紀	1
28	出島図	Map of Dejima	1735 年頃	1
29	紅毛人プラケット	Samll wall hanging with Picture of a Dutch trader	18 ~ 19 世紀	1



30	紅毛人硯屏	Inkstone screen with Picture of a Dutch trader	19 世紀	1
31	潜伏キリシタンころび証文	Document with blood seal	1850 (嘉永 3) 年	1
<b>IV. 禁教解禁に向かって</b>				
32	阿蘭陀国使節長崎入船 黒田鍋島陣営図	Picture of Dutch ships entering Nagasaki port		1
33	プチャーチン会談の図	Illustration of negotiations with Admiral Putyatin	19 世紀	2
34	米利幹事略	Records written concerning events with America	19 世紀	1
35	安政五ヶ国条約 (写)	The Unites States-Japan Treaty of Amity and Commerce (copy)	20 世紀	5
36	蛮艦泊碇港之図	Picture of foreign ships in Nagasaki anchorage	19 世紀	1
37	キリシタン制札	Proclamation banning Christianity	1868 (慶応 4) 年	1
38	耶蘇宗徒群居搜索書	Documents related to search operations on christian houses	1875 (明治 8) 年	1
39	ベッテルハイム訳聖書 馬太伝福音書	Gospel of Matthew, J. B. Bettelheim version	1855 年頃	2
40	ゴープル訳聖書摩太福音書	Gospel of Matthew, J. Goble version	1871 年	1

# 論考





# 東北学院大学博物館の名品

東北学院大学文学部 准教授 加藤 幸治  
東北学院大学博物館学芸研究員 熊谷 明希

東北学院大学博物館は、本学土樋キャンパスに隣接し、仙台市中心部の愛宕上杉通りに面して建つ大学博物館である。当館は、本学の教育、研究成果にかかわる学術的価値を有する資料を収集整理、保管、公開、普及し、本学の活動を社会に伝えることを目的としている。また、大学における博物館学芸員資格課程の実習施設としての役割を担い、実物資料を用いた学習機会を提供している。

今回の西南学院大学博物館との合同展では、「東日本大震災と文化遺産」と題した展示を企画したが、当館の名品も福岡のみなさんにお見せしたいと考え、「墨書人面土器」と「おしらさま」の特別出陳を行った。東北らしい文化財から少しでも東北の歴史と民俗に関心を持っていただければ幸いである。ここではこのふたつの展示資料について解説する。

## ●[宮城県多賀城市]市川橋遺跡 「墨書人面土器」

墨書人面土器とは、土器の外面に人の顔が描かれた土器で二～四面描かれるものが多く、器形は主に壺・甕である。平城京・長岡京・平安京といった古代の宮都から多く出土し、地方からは国衙や郡衙のような官衙関連遺跡から多く発掘される。出土遺構は、溝や河床といった「流れ」に関する場所がほとんどである。

古代の儀式書には、祓(罪・穢・病気・災厄などをはらい除く行事)の際に、天皇が「埴」に息を吹きかけてそれを河に流すという記載がある。河川跡などで発見される墨書人面土器も、恐らく穢や病気等をはらう目的で河川



に流されたものと考えられる。

博物館所蔵の墨書人面土器は、高さ16・2cm、口径15・5cm、胴経15・1cm、底経7・0cmの深鉢型の土師器で、外面に1・0cm～1・5cmの段が附せられている点から、轆轤成形の土器であることが分かる。土器の年代は、形式から考えて平安時代前期のものとして推定されている。人面は四面描かれており、眉・目・鼻・口・鼻ひげ・あごひげ・耳が端正に表現されている。

昭和34年(1959)～昭和37年(1962)に行われた砂押川河川改修工事の際に、多量の遺物と伴に出土し、出土層は現在の市川橋付近の水田面下3～4の黒色土層と考えられている。発掘後、東北学院大学工学部に保管展示され、その後文学部史学科加藤孝助教授(当時)が研究資料として土樋キャンパスに持ち帰るが、定年退職時に多賀城市埋蔵文化財調査センターに寄託された。平成21年(2009)4月に大学博物館設立に伴い当館の展示資料となり、現在に至る。

出土地である市川橋遺跡は、多賀城跡の南側に広がる遺跡である。多賀城には陸奥国府が置かれ、律令国家による東北支配の拠点であった。城内では日常政務の他に、政庁において元日朝賀・蝦夷の朝貢儀礼等の儀式が行われた。一方、城外においては市川橋遺跡をはじめ、河川跡から奈良～平安時代の遺物として墨書人面土器の他に齋串や人形など祭祀に関わる遺物が数多く出土している。おそらく、市川橋遺跡周辺の河川において、多賀城の役人あるいは律令公民らによる水辺の祭祀が行われ、本資料が使用されたと考えられる。(熊谷)

## ●[岩手県一関市]大乘寺伝来 「おしらさま」

岩手県を中心とした東北に広く分布するおしらさまは、蚕の神、農業の神、馬の神などとして信仰されてきた。おしらさまはふつう、家の神として保管され、毎年の祭日に衣を一枚重ね足して祭礼を行なう「おしらさま遊ばせ」をするものが多いが、当館で展示するおしらさまはそれらとは少し違う。それは、かつてオガミサマ・イタコなどと呼ばれた民間宗教者が祭具に用いたものとされている点である。

本資料は、もともと岩手県一関市川崎町薄衣の大乘寺に保管されていた二体一対のおしらさまで、1606(慶長11)年の紀年銘の入った大変古いおしらさまである。

大乘寺には祀られなくなったおしらさまが多数納められている。現在取められている合計二百体ものおしらさまは、家の神様としてのおしらさまとは異なり、貴重な資料群として岩手県の有形民俗文化財に指定されている(当館所蔵資料は指定外)。

おしらさまのコレクションとしてもっとも有名な資料は、国立民族学博物館所蔵のおしらさまコレクションである。このコレクションは1599(慶長4)年の紀年銘のあるものをはじめ33体で構成されている。実はおしらさまに年号を入れることは一般的なことではない。1600年ごろの銘が入ったおしらさまが、当館や国立民族学博物館だけでなく全国に複数残っていることが何を意味するのかわからない。おしらさまの祀られ方も時代的な変遷があると思われるが、これを明らかにする資料は少ない。おしらさまは、いまだ謎が多い文化財なのである。

(加藤)





# 東北におけるキリスト教布教と禁教

熊本大学文学部  
准教授 安高 啓明

## はじめに

1549年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸する。ザビエルにもたらされたキリスト教は、トルレスらによって素地が築かれ、さらにアルメイダらによる精力的な活動もあって、西日本域にキリスト教が浸透、定着していった。その成果は、大村純忠や有馬義貞・晴信、大友宗麟などといったキリシタン大名を誕生させたことによってあらわれ、家臣はもとより、領民の多くもキリシタンとなる現象が生じた。領主の改宗、そして領民へ伝播するといった布教活動は、イエズス会の宣教方針が効果的に機能していったものといえよう。

当時の布教活動は西日本域、特に九州において積極的におこなわれていた。そのため、京都をはじめ、各地に寺院(廃寺)を修築した南蛮寺がつくられ、ここがキリシタンにとっての信仰の拠点となっていた。また、九州には、コレジョやセミナリヨ、ノビシヤドといった教育施設もおかれるなど、日本人に対する人材育成も図られていった。南蛮船がもたらした文物によって富を得ていた大名家のなかには、キリシタンに転じる者もあらわれ、またキリスト教側からすれば、南蛮貿易による商業利益の確保にあわせておこなわれた布教活動は、表裏一体のなかで展開されていたのであった。

ザビエル来航以来、受容されてきたキリスト教も、16世紀後半から布教および信仰に制限を受けることになる。豊臣秀吉による伴天連追放令、さらには徳川幕府政権下においても、度々、禁教令が出されるようになる。こうした状況下におかれると、棄教への動きが加速し、宣教師たちの境遇も変化してくる。都はもとより、かつてキリスト教が根付いていた地域では、布教することはもちろん、信仰することさえも困難となっていく。

これまで、西南学院大学博物館において九州におけるキリスト教史を取り上げ、展覧会や図録を通じて布教、信仰形態、さらに禁教政策について紹介してきた。しかし、京都以東におけるキリスト教布教活動や信仰形態については論じてこなかった。そこで、本稿では、東北におけるキリスト教史を、布教活動の展開や信仰の実態、さらには、キリシタン弾圧の側面から概観していく。このなかで九州のキリスト教史と比較することで、共通点と相違点を見出し、東北のキリスト教史の特徴を紹介していく。なお、本論では、松田毅一編『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』(同朋舎、1987年)などをもとに紹介していく(以下、編者および書名は省略し、巻数・頁数のみを記載する)。

## キリスト教の東北伝播

東北地域におけるキリスト教布教の展開は、伊達政宗の旧領の会津地方と仙道地方(白川・石川)を合わせて九十万石余りを有する蒲生氏郷がキリシタンとなったことが大きい。蒲生氏郷は、1584～1585年頃にキリシタンになったとされ、自領の伊勢に司祭や修道士の派遣を要請していた人物である(村井早苗「会津のキリシタン」小峯和明編『キリシタン文化と日欧交流』勉誠出版、2009年、164頁)。蒲生氏郷は1590年に会津に入封することになるが、この時、すでにキリシタン大名として着任していることになる。蒲生氏郷は1595年に死去するものの、その時、キリシタンの重臣が伝えた氏郷の言葉は、東北地域のキリシタンの事情をよくあらわしている。

全領民が我ら(キリシタン)の教えを知ろうと熱望している。誰か修道士を一名、説教のために(派遣されるよう)期待してやまない。

死に際して、領主自らが修道士の派遣を熱望していることがわかる一文である。当時のキリスト教布教は、領主が改宗、そして布教活動の許可を経て、領民へ伝道するという手段がとられていた。会津地方では上記のような領主の意向があったことを考えれば、こうした環境が既に整えられていたのである。ひとえに氏郷が会津に入封前から熱心なキリシタンだった故の言葉であろうが、この要望が会津で実現するのは、幕府禁教令の発布後のことでキリシタンの境遇が悪化していたなかだった。実際に、元和・寛永年間に、イエズス会宣教師アダミ、イ

ルマン山ジョアンが潜行して活動していたことが明らかにされている。

さらに、東北地域とキリスト教の接点について、木鎌耕一郎氏は津軽の事例から指摘している（「津軽氏とキリシタン—津軽為信のキリスト教への接近(1)」『八戸学院大学紀要』第49号、2014年、15～36頁）。ひとつはキリシタン世紀後期に津軽為信、その息子である信建と信牧が京都と大坂で接し、息子二人が受洗したこと。もうひとつは、津軽にキリシタンたちが流刑されたことを挙げている。両者は相対する性格的接触ではあるものの、これは東北地方へのキリシタン伝播の一形態といえよう。

津軽氏の動向については、ルイス・フロイス「1596年度日本年報」にも記されている（五野井隆史「16・17世紀、蝦夷情報とキリシタン」『サピエンチア 英知大学論叢』48号、2014年）。

最近、都から30日遠方の北方の日本の最端にある国の領主津軽殿（為信）Tcugarudono señor de un reinoの子息であるヴォギ（信牧）Vôguiファンという一大名un señor grandeがキリスト教徒になった。彼は異教徒である父の求めによってキリスト教徒となった。彼、津軽殿は何年か前に大坂でイルマン・ヴィセンテ（洞院）の説教を何回か聴聞していた。今年は説教をすべて聴聞し終わってキリスト教徒になる決断をした。

1549年にフランシスコ・ザビエルが来航して以来、九州をはじめ、西国中心に布教されていたが、これにより津軽へも布教が展開されることになった様子がわかる。九州にキリスト教が伝来してから遅れること47年後のことではあるが、日本の最北端にキリシタン大名が誕生したことを示している。津軽信牧は大坂で説教を受けており、これが契機となってキリシタンとなっていることを考えれば、キリスト教布教が現地で行われていたのではなく、京都・大坂が布教の拠点となっており、ここでの活動成果が、遠方地でのキリシタン大名の誕生に大きく寄与することになったのである。なお、父親である津軽為信自身は「異教徒」であるにもかかわらず、息子の信牧、さらには兄である信建・信堅と同じく受洗している。これは後に福岡に入封する黒田如水と長政との関係とは異なる動きとなっている。

また、出羽国におけるキリスト教伝播について、「1596年度年報」（第I期第2巻、246頁）には次のようである。

津軽の国に隣接する出羽の国に伊勢守殿という高貴で勇敢な武將がいる。彼は本年都を訪れたが、知人のキリシタンから聞いた以外、我らの諸事情についての知識はなかった。しかし彼はキリシタンの教えを聞いて非常に短期間のうちに大きな効果をあげ、しばらくして己がすべての従臣たちとともに洗礼を授かった。

こうした動きからみてもわかるように、東北地方では、有力領主が京都に訪れ、キリスト教の説教を聞き、その上で受洗していることがわかる。彼らは、積極的に司祭館を訪れているようであり、イエズス会側も「この小さな種子が大なる収穫をもたらすであろうことを、我らは疑わない」と評しているように、大いに期待を寄せていることがわかる。ザビエル来航当初におこなわれていた布教形態であった、宣教師自身が現地を訪れ、そこを拠点とした布教活動とは異なり、都を訪れる領主層に対して説教し、その後、現地でキリシタン大名となるように変容していたことがわかる。

東北地方において、キリスト教の布教活動を媒介にした南蛮通商を図った人物が伊達政宗である。伊達政宗は、幕府からの支持も得た上で、フランシスコ会修道士ルイス・ソテロを通じて、1613（慶長18）年9月に支倉常長をスペインに派遣している。一行は翌年11月にマドリッドに到着し、1615年にはフェリペ三世に謁見し、正宗からの書状を手渡している。支倉常長自身はここでキリスト教の洗礼をうけており、フランシスコの霊名を授かっている。そして、ローマ教皇パウロ五世からの書状を携えて、1620（元和6）年にマニラ経由で長崎に到着、そして、8月24日に仙台に戻っている（松田毅一『慶長遣欧使節』朝文社、2002年）。

これは、支倉常長らで構成された慶長遣欧使節の行程であるが、一行は派遣前後でその境遇も一変する。支倉常長は1615（元和元）年、ローマ市から公民権を贈られ貴族に列せられるなど、盛大な歓待を受けたものの、帰国した日本では、徳川政権下によって、禁教政策が強行されていた。これは後述する慶長禁教令の発布であるが、かつてこれと同じような状況があった。九州諸大名（大村純忠・有馬晴信・大友宗麟）の名代として派遣されていた、伊東マンショ・中浦ジュリアン・原マルチノ・千々石ミゲルらで構成された天正遣欧使節団である。彼らは1582年に長崎を出航し、1590年に帰港するまでの間、多くの西洋文化に触れていた。しかし、この間の1587年、豊臣秀吉が伴天連追放令を発布し、宣教師の追放と布教の制限をうける国内情勢となっていた。慶長遣欧使節団もこれと類する動きが生じており、キリスト教布教を媒介にした対外交渉は、当時の政権による宗教政策によって左右されるものだったともいえよう。

支倉常長を通じて伊達政宗に仕えた人物に後藤寿庵がいる。政宗は後藤寿庵にキリスト教の信仰を許しており、これを受けて周辺のキリシタンたちは、彼を非常に頼っていた。領地である見分村には、イエズス会の司祭ディオゴ・カルヴァーリョも訪れており、彼の報告のなかでは「後藤寿庵（ジョアン）という名の高潔なキリシタン」（第II期第3巻、229頁）と評するほどだった。見分村では、降誕祭や聖なる祭りを祝ったり、後藤寿庵のもとで、安定した布教活動がおこなわれていたのである。こうした動きも、禁教政策によって制限されるうえ、さらには迫害へと転じることになる。後藤寿庵は頑なに棄教を拒むなど、東北地域にも熱心なキリシタンの存在が確認され



る。後藤寿庵自身は長崎滞在中にキリシタンとなったようだが、改宗後に正宗のもとへ訪れており、仙台である程度容認されていたキリスト教政策の土壌のもとに着実にキリシタンを増やしていたのである。

## 禁教と弾圧の展開

前述したように、東北地方にキリシタンが伝わったのは16世紀後半であり、九州における広がりとは一線を画していたことがわかる。そのため、当初のイエズス会およびフランシスコ会側が想定していたよりも、熱心なキリシタンを誕生させるまでには至っていなかったのが現状であり、キリスト教が定着する間もなく、日本は禁教の世に入っていくことになる。1612(慶長17)年に徳川秀忠は直轄領に対する布教の禁止を打ち出した「慶長禁教令」、その翌年二月には私領に対しても教会の破壊や布教活動を禁じる禁教令を發布する。さらに、五月には「邪宗門吟味之事 御條目宗門檀那請合之掟」、十二月には「伴天連追放文」を發布している。こうした状況に対して、イエズス会側は1620年度報告により、次のように記している(第Ⅱ期第3巻、82頁)。

キリシタンに対して、特に我らイエズス会、および福音の教え(キリシタン宗門)の他の宣教者に対して加えられる暴力や残虐さも同一である。【中略】この間に国主(将軍)は、あらゆる手を尽くして一人の宣教師も国内へ潜入させまいと努め、そのため禁教を公にし処罰を設けてキリシタンを切り刻んだ。

豊臣秀吉による伴天連追放令に端を発した禁教令は、徳川政権下において一層厳しくなっており、イエズス会側も難儀している様子が伺える。「八宗九宗の原則」や幕府の思想統制にも反するキリスト教は邪教と位置付けられ、弾圧の対象となったのである。こうした全国的な禁教の動きは、九州域はもとより、東北地方にも波及することになる。

この頃、奥州には二人のイエズス会員(ジェロニモ・デ・アンジェリスとディエゴ・カルヴァーリヨ)が滞在しており、域内では966名が洗礼を受けていた。数ヶ月間であげた成果としては「当地方の面目を一新した」というように、これまでにないものとなっていたのである。しかし、上記の禁教令などを受けて、奥州でも次のような動きが出てきている(第Ⅱ期第3巻、124頁)。

この領国(奥州)の大名たちは、将軍がかの残忍きわまる命令を発して多数のキリシタンを火刑に処するよう宣告したという噂を聞くと、己が身と領国の安全を図るために、自領にいたすべての信徒たちにキリシタン宗門を棄てさせようと決意した。

徳川秀忠の意向により、奥州の諸大名は領民に棄教を勧めていることがわかる。そこには自己保身と領有権保持が背景にあり、封建的主従関係にある幕藩体制下にあつて、幕府の禁教政策を如実に反映した措置が奥州でもとられたのであった。こうしたキリシタン弾圧は、イエズス会側からしても“残忍”な行為として認識されており、キリシタンに対する火刑の執行が危機感をさらに募らせることになった。そのため、「江戸の将軍が私たちの聖なる信仰を憎悪としたことが、日本のほとんどすべての大名にも、それぞれの領国で同様に振舞わせることになった」(第Ⅱ期第3巻、229頁)とあるように、将軍の絶対性を痛感している様子が看取される。

スペインとの通商に積極的だった伊達政宗だったが、1613(慶長18)年に全国へ発布したいわゆる慶長禁教令によって、キリシタン弾圧へ転じることになる。法的にも1615(元和元)年に仙台藩で禁教令を發布し、これによりさらに強硬な姿勢がみられる。特に実行役であった茂庭石見綱元の禁教政策への決意と当時の弾圧の状況について、「1624年度日本報告」によれば、次のことが記されている(第Ⅱ期第3巻、230頁)。

(茂庭石見)私たちの聖なる信仰を非常に憎しみ、後藤寿庵(ジョアン)にほとんど好意を抱いていなかった。それ故彼は荒い言葉で、政宗にはジョアンをこの迫害から除外するつもりのないことをほのめかし、さらにジョアンの許にいるキリシタン全員の抹殺が始まるだろうと明言した。

幕府禁教令を受けて、仙台でもキリシタン捜索がはじまると、政宗は「後藤寿庵のことはさておくように」と指示しており、格別の配慮を促していた。しかし、仙台では茂庭綱元が上記のような認識を示しており、幕府禁教令による法的正当性のもと、例外なくキリシタン弾圧を展開することを示唆している。さらには「棄教しようとしなければすべてのキリシタンは仙台の牢獄に送り、奉行の意向通りに死刑に処する」(第Ⅱ期第3巻、232頁)と、徹底したキリシタン取り締まりをおこなっている。

こうしたなかでも後藤寿庵は、棄教することはなかった。伊達政宗の家臣らが棄教の説得を試みるも、「私ジョアンは信仰を棄てるつもりはないし、この宗教に帰依していることを是非納得してもらおうつもりでいる」(第Ⅱ期第3巻、231頁)と強い信仰心を示し、さらに「キリシタンの戒律は、もし誰かが本当にキリシタンであるのならば、たとえただ一人の人しかいなくても、言葉に出して信仰を否定することを許してはならないのだから」(第Ⅱ期第3巻、232頁)とキリスト教の教えを根拠に、棄教勧告を否定していることがわかる。

棄教勧告にあたっては、後藤寿庵の領地である見分村や周辺の者たちが一晩中説得を試みている。また、政宗

自身も説得にあたっていた奉行内膳に書状をしたためており、その内容は「後藤寿庵もできる限りキリストの戒律を放棄するように忠告し、もし彼がそうすることを拒めば、領国から追放する」(第Ⅱ期第3巻、231頁)というものだった。後藤寿庵は最後まで棄教を拒んだために、南部へ追放されることになったものの、1624年度日本年報には「非常に樂しげに」追放されたと記されている。処罰よりも、キリスト教を守ったことへの裏返しであろうが、政宗による忠義を反映しているともいえる。後藤寿庵がキリシタンを理由に処罰されることに対して、一通の書状を残している(第Ⅱ期第3巻、231頁)。

彼(ジョアン)は殿に対しては義理を感じており、必要とあらば、殿のために生命を棄てることも辞さないが、信仰のことについては命令にしたがうことはできない[中略]もし殿が自分を追放したり死罪に処したりしても憎しみを抱かずにそれを甘受する用意ができています。

伊達家の家臣としての忠誠心を持ち合わせていることはいうまでもないが、キリスト教信仰については一線を画している。誰であっても信仰に関与すべきではないという姿勢を明確にしていることがわかる。しかし、キリシタンであることを罪状として、政宗が処罰するのであれば、これを甘んじて受け入れると示している。前述した後藤寿庵の“樂しげ”に追放されているさまは、この文言から納得させられる。厳しい禁教政策が展開されているなかで、奥州においても、数多くのキリシタンたちが棄教した。他方で、後藤寿庵のように頑なに信仰を固持したのもいたことがわかる。

## おわりに

九州諸国をはじめとする西日本域においては、いち早くキリスト教との接触があり、多数のキリシタンを誕生させた。これにともない、天正遣欧使節や慶長遣欧使節にみられるように、大名名代として使節団を派遣するなど、外交目的としてキリスト教が利用されていた。他方、キリスト教布教が遅れた東北地方においては、伊達政宗による対西交渉も江戸幕府政権下でおこなわれている。1613年に全国的禁教令が出されたことによって、支倉常長らで構成される慶長遣欧使節の意義も薄らいでいくことになったが、キリスト教の受容は海外派遣の前提に近いものとなり、対外交渉のうえで直結する行為でもあった。つまり、キリスト教の布教活動を容認することを対外的にアピールする機会であり、こうした正当性のもと積極外交を展開する藩側の思惑もあった。

イエズス会による布教活動も、日本年報などでその実態を確認することができる。なかでも、奥州のあと出羽へ入り、津軽へ向かったディエゴ・カルヴァーリョの存在は無視できない。他方、宣教師がその国を訪れて、領主からの布教の許可と領民らの信仰の許容を得ていた布教活動とは異なる動き、換言すれば、都を訪れてキリシタンとなったものが各地へ散在するといった現象が東北地方では数多くみられる。いわゆるキリシタン世紀(ザビエル伝来から鎖国令完成までの約100年間)において、キリスト教への帰依への動きが強まったことから生じた傾向ともいえよう。

キリスト教の東北地方への布教活動も効果的におこなわれていたことは、後藤寿庵の一連のやり取りのなかで知ることができよう。また、これと類するものとして、1620年度日本年報によれば、十一歳の少年の事例が記録されている(第Ⅱ期第3巻、125頁)。少年の父親はかつてキリシタンであったが、その後、棄教したことをきっかけに、かつて自分が勧めてキリシタンとなった子供に棄教を求めている。しかし、この少年は、頑なに拒否し、キリスト教を棄てた父親を恥とし、父母の不誠実と不正不義に従うよう命ずる律法や宗派はないと断罪している。激怒した父親は出て行けと罵声をあびせると、少年は「自分は大喜びでキリスト様の御名のために流浪の罰と不自由を耐え忍びましょう」と返答している。儒教精神を柱とした近世社会において、少年のとった行動は許しがたい暴挙であるが、これもキリシタンゆえの行為といえよう。

多くのキリスト教の種が蒔かれた結果が、こうしたキリシタンの動向としてあらわれている。九州より遅れて展開された布教活動も、着実な成果として浸透していくところとなり、さらには強固なものとして定着していたことがわかる。九州でおこっていた現象と同じものが、遠く離れた東北の地でもあらわれていたのである。



# フィリピンにおけるキリスト教伝来と キリスト教美術の展開

西南学院大学博物館

学芸研究員 内島美奈子

## はじめに

フィリピンは、アジア唯一のキリスト教国である。日本とほぼ同時期の1520年代～60年代にかけてキリスト教が伝えられ、その後急速に広まり、現在でもカトリック教徒が90パーセントを占めている。同地では、盛んにキリスト教の聖人の像や板絵が制作された。その中心地であるマニラは、日本と通商を行っており、キリスト教の文物が行き来していた可能性が指摘されている。本稿では、フィリピンのキリスト教伝来と、同地で盛んに制作された聖像・聖画像についてみていくとともに、日本との関係についても言及する。

## 1. フィリピンへのキリスト教伝来、そして日本との関係

15世紀に始まる大航海時代、ポルトガルやスペインなどの西欧の国々が世界に向けて航海に繰り出し、アメリカ大陸やアジア諸国へ到達した。ローマ教皇を頂点とするカトリック教会は、宗教改革による危機感から新たな信者を獲得するため、航海に出る探検隊とともに宣教師を派遣した。そうした流れのなか、フィリピンには、1521年にマゼラン隊が到着する。その後、幾度となく同地に向けて遠征隊が出され、5回目となる1565年のレガスピ隊到着で、本格的な侵略とキリスト教の布教が行われた<sup>1</sup>。その後、フィリピンでキリスト教が急速に浸透していき、約30年間で、66万7612人がキリスト教に改宗したとされている。

キリスト教が急速に浸透した要因について、先行研究では一神教の考えや洗礼に類似した儀礼が同地にすでにあったことや、それが病氣回復に有効と信じられたこと、さらに家族と部族の深い結合関係が社会的プレッシャーとなり、集団での改宗が進んだことなどが挙げられている。さらに、宣教師は布教に努める一方で、新しい町や学校の建設、産業の育成など、西欧文化の伝達をとおして、同地の発展に尽力したとされる。そうして、キリスト教の受容とともに、経済的に発展していった都市も出てきた。

とりわけ、現在のフィリピンの首都であるマニラはアジアの通商の中心として繁栄し、アジア布教の拠点ともなった。マニラを中国・日本への布教の足掛かりと考えた多くの宣教師、とくにスペイン系托鉢修道士が集まった。禁教時代には、日本での迫害を恐れ、マニラやその他の町に移住する日本人キリシタンや、マカオとともに宣教師たちと日本人キリシタンの国外追放先ともなっていた<sup>2</sup>。禁教令に先だてて、1623年にフィリピンと民間交流が遮断されるなど、日本におけるキリスト教布教とフィリピンとの重要なつながりが指摘されている<sup>3</sup>。

## 2. フィリピンのキリスト教美術—サントの制作の背景

フィリピンにキリスト教が伝えられた当初、宣教師や船乗りによって聖画や聖像が持ち込まれた<sup>4</sup>。現在フィリピンで篤く信仰を集める聖画などは、この時期に、西欧や南米より持ち込まれているものが多いという<sup>5</sup>。フィリピンではキリスト教の像も板絵も多く制作され、とくに像はスペイン語の聖人という言葉に由来して「サント」と呼ばれる<sup>6</sup>。フィリピンでは、もともと像を儀式に用いる風習があったとされ、サントの制作は同地に根付き、17～19世紀にわたって活発に制作された。フィリピンには様々な種類の本があり、サントの素材として使用され、費用や用途によって選択された。また、象牙も使用され、顔や手のみ象牙製であるのも多くみられる。まれに骨製のものもある(図1)。その制作の初期には、宣教師のほか、フィリピンに多く滞在していた象牙彫刻の能力の高い中国人が担っていたといわ



図1 修道士  
(西南学院大学博物館所蔵)

れるが、数世紀にわたって制作されたその大半はフィリピンのひとびとの手によるものであった<sup>7</sup>。

サントが制作された目的は主に2つある。ひとつめは、教会や修道会などの公的な場におかれるためである。概して大きいサイズのもが制作され、材料も高価なものが用いられた。ふたつめは、家庭の祭壇を飾るためであり、サイズも小さいものが多い。制作された主題は、聖母に関連するものが多く、とくに「無原罪懐胎の聖母」(資料no.18)、「ロザリオの聖母」、「柱の聖母」などが頻繁に制作された。さらに、聖なる子どもという意味のサント・ニーニョも人気である。これは、幼いイエスの立像であり、マゼラン隊がキリスト教の洗礼を受けたセブの住人に送ったことに由来するという<sup>8</sup>。その他、聖ロクスや聖ヨセフ、大天使ミカエル(図2)などがよく見られる。

とりわけ、フィリピンは「無原罪懐胎の聖母」を守護聖人としていることから、同主題は頻繁に描かれている。その背景には、フィリピンに向けた船が出航していたスペインのセビーリアにおいて、頻繁に描かれた主題であったことが関連していると思われる。つまり、スペイン系修道士が多くいた同地には、当時スペインで流行していた図像の複製などが持ち込まれたと推測でき、それらが見本となっていたと思われる。

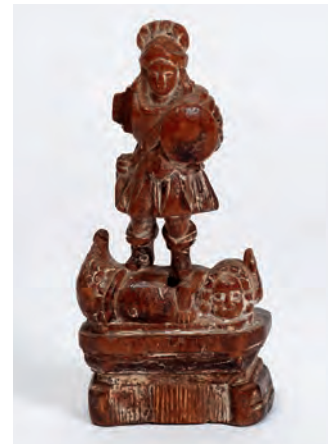


図2 大天使ミカエル  
(西南学院大学博物館所蔵)

### 3.日本へ渡ったサント？

日本でも同様に聖画などが制作されたが、九州などの一部地域での一時的なものであり、禁教下のなか破壊を免れて伝えられたものは、その多くが舶来品である。フィリピンと日本は、フィリピンにスペイン人が渡来する前から通商を行っており、その行き来が禁止されるまで、さまざまな商品が日本にわたっていた。それらに混じり、スペインからもたらされたキリスト教の聖画や聖像、フィリピンで制作されたサント等が、宣教師たちの手によって日本に持ち込まれた可能性はある。

ただし、17世紀前半には通商は禁じられたため、聖画や聖像が持ち込まれる可能性があるのは、16世紀末から17世紀初頭という限られた期間である。ここで、フィリピンから伝えられたものについて明らかにすることはできないが、フィリピンのサントの特徴に類似する点をもつ、2つのキリシタン遺物を指摘したい。ひとつめは、南蛮文化館にある「スカプラリオを持つマリア像」である。マリアのマントや衣服が三角形を形成している点や、台座を有する点などが、類似点として挙げられる。また、仙台市博物館が所蔵する「悲しみのマリア像」は彫像ではなく絵画ではあるものの、同様の衣服の三角形をなす点や、台座の表象が見られる<sup>9</sup>。後者は、会津地方のキリシタンから押収されたものとされ、それ以前の由来はわかっていないが、17世紀初頭に制作されたものとされており、フィリピンの通商を通じてもたらされた可能性もないとは言えない。

以上、フィリピンのキリスト教の伝来とキリスト教美術について簡単にみてきた。これらについて知ることは、キリスト教における日本とフィリピンの深い関係性から、日本のキリスト教史を知るうえで重要であると思われる。

- 1 フィリピンにおけるキリスト教伝来について以下を参照。玉置泰明「フィリピン初期キリスト教化をめぐる覚書——ラファエルの「翻訳」改宗論を中心として」『社会人類学年報』21号、1995年、55-78頁；グレゴリオ・F・サイデ「フィリピンの歴史」松橋達良訳、時事通信社、1973年。
- 2 高山右近とその家族、大友宗麟の娘も同地に追放されている。グレゴリオ、前掲書、224頁。
- 3 清水有子「日本布教拠点フィリピンの成立と「鎖国」」『キリスト教史学』59号、2005年、85-108頁。
- 4 フィリピンのキリスト教美術については以下を参照。Fernando Zobel de Ayala, *Philippine Religious Imagery*, Ateneo De Manila, 1963; *The people and art of the Philippines*, ed. Gabriel Casal, Museum of Cultural History, University of California, Los Angeles, 1981.
- 5 De Ayala, *op. cit.*, p.11. たとえば、マニラ近郊のアンティポロの大聖堂の主祭壇に置かれている、平和と航海の聖母と呼ばれる像がある。メキシコで作られたもので、1626年に32代総督に就任したファン・ニーニョ・デ・タボラによりもたらされた。
- 6 レガラド・トロタ・ホセ「サントーフィリピンの聖なるイメージ」『フィリピンの聖なる像サント』福岡アジア美術館、2003年、14-17頁。
- 7 中国とフィリピンとの接触は古く、10世紀頃には通商がなされ、中国商人・職人のことをサングレイ(Sangley)と呼んだ。グレゴリオ、前掲書、18-19頁。
- 8 1565年にレガスピ率いる遠征軍がセブ島のある集落を占領したとき、幼子イエス像が置き去りにされた家屋から発見された。それが44年前にマゼランが残した贈り物そのものだと信じられたため、にわか作りの礼拝堂に安置された。今でも、その同じ場所にある聖堂には、このときの聖像(サント・ニーニョ・デ・セブ)が奉られている。レガラド、前掲書、15頁。
- 9 本作品については以下を参照。『キリシタン美術と仙台展』仙台市博物館、1980年；村井早苗「会津のキリシタン」『キリシタン文化と日欧交流(アジア遊学127)』2009年、163頁；若桑みどり「聖母像の到来」青土社、2008年、124-125頁。



# イベント情報

## 特別展関連

西南学院大学博物館 × 東北学院大学博物館 合同イベント

入場無料

in 西南 7月5日(日) 10:00~17:00

### せいなん+とうほくこどもワークショップ「東北の“すべらない話”」

時間／10:00～12:00 場所／西南コミュニティーセンター

### ミュージアム・セッションⅡ「実学教育の拠点—大学博物館の役割と活動報告」

時間／14:00～17:00 場所／西南学院大学博物館2階講堂

【ごあいさつ】西南学院大学国際文化学部教授・大学博物館長 宮崎 克則

【第1部】題目／「大学博物館活動と実践的教育」

講師／安高啓明氏（熊本大学文学部准教授）

【第2部】①学生によるプレゼンテーション

題目／「被災地で展開する学生による移動博物館活動の報告」

報告者／秋田彩絵さん・門脇花珠さん・前田諒さん・森山茜さん

（東北学院大学4年・文化財レスキュー班）

②講演

題目／「みんなで活かす地域の文化資源

—「牡鹿半島・思い出広場」の活動から—

講師／加藤幸治氏（東北学院大学文学部准教授）

in 東北 7月11日(土) 10:00~15:30

### せいなんおでかけワークショップ「おもしろセンス～手作りセンスをつくろう～」

時間／10:00～12:00 場所／東北学院大学博物館

### 公開講演会

時間／13:30～15:00 場所／東北学院大学博物館

【ごあいさつ】東北学院大学文学部教授・大学博物館長 辻 秀人

【第1部】題目／「デフォレスト館の“屋根”から仙台の近代を眺めたら…」

講師／加藤幸治氏（東北学院大学文学部准教授）

【第2部】題目／「日本キリスト教史のなかの東北」

講師／安高啓明氏（熊本大学文学部准教授）

### ミュージアム・トーク

時間／15:00～15:30 場所／東北学院大学博物館

講師／内島美奈子氏（西南学院大学博物館学芸研究員）

西南学院大学博物館2015年度春季特別展  
大学博物館共同企画V

---

## Nexus展

---

編 集 内島美奈子  
協 力 安高啓明  
資料解説 加藤幸治 安高啓明 内島美奈子  
編集補助 山尾彩香 阿部大地 吉岡香澄 野藤妙  
筒井晴佳 唐島慎一  
英文翻訳 内島美奈子 阿部大地 吉岡香澄  
筒井晴佳 野藤妙  
発 行 西南学院大学博物館  
〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号  
発 行 日 2015(平成27)年6月12日  
印 刷 株式会社 インテックス福岡